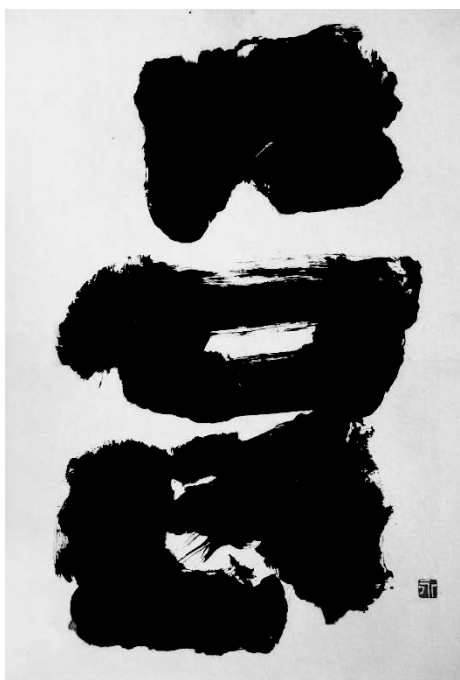


河正雄コレクション 資料集 第7号

植松 永雄



2022 年 4 月

河正雄コレクション 資料集 第7号

植松 永雄

目次

はじめに	2
序―哲学共有、水魚の交わり	3
文は人なり 書も人なり（河正雄）	4
峡山書について（中込鮎）	7
植松峡山を励ます（小澤龍一）	8
I 植松永雄の書（河正雄コレクションより）	10
俳句	22
II 河正雄×植松永雄	24
美の探求と人情味（内野修）	40
短歌	44
人と人との繋ぐ（沖ななも）	55
III 自伝	60
私の書道遍歴	67
年譜	70
写真	86
河正雄コレクションとは	96
図版データ	107

凡例

○本書は、河正雄が蒐集・寄贈した「河正雄コレクション」の一つで、書家・峡山植松永雄を紹介する資料集です。

○巻頭に中込鮎氏（蕩墨書道會代表）と小澤龍一氏（元高校教諭）に寄稿いただきました。

○河正雄作の俳句は内野修氏、短歌は沖ななも氏にそれぞれ添削を受けました。植松永雄の俳句・短歌作品（短冊、色紙）は添削前に書かれたもので、必ずしも一致しません。

○植松永雄の自伝「私の書道遍歴」を『峡山植松永雄 書五〇年展』より転載しました。

○著作権の保護については、可能な限り配慮を心掛けましたが、お気づきの点があればご教示いただければ幸いです。

○本書では人物の敬称を原則として省略させていただきました。

序―哲学共有、水魚の交わり

河正雄が植松永雄と出会ったのは二〇一〇年の二月。「峡山 植松永雄 書五〇年展」の直後のこと。共通の友人小澤龍一（元高校教諭、「清里銀河塾」塾長代理）の案内で甲府の自宅を訪ねた。その時、河の目にとまったのが「〇〇□」（口字の変形三つ）で表現された「吾」だった。その後二人は水魚の交わりを結び、二人三脚で歩んできた。



「東京に残ってほしい」。植松は大学時代の恩師石橋犀水の誘いを断り、生まれ育った山梨の地で高校の書道教師になった。

自宅で書道教室を開くという選択肢もあったが、「（師）になるのは嫌だった。書道界の古い権威主義になじめず、反骨精神にあふれていた。「ピラミッド」の頂点に立つ人と下の人は話もできない。そんな師弟関係はおかしいと思っていた」

だから「（師）」を持たず、書壇にも属さなかった。書に優劣を付ける公募展とも無縁。高校の書道教師を続けながら個展で作品を発表し続けた。

「（師）」にはなりたくない」という信念から、上から一方的に「教える」教師ではなかった。授業では手本と朱墨を一切使わず、生徒のやる気を引き出す独自の教授法を考えた。

「例えば極端に太い文字と対極の細い文字の古典を示し、自分の好みの文字を考えてもらおう。我慢してじっと待った。もし私が手本を書けば生徒は真似するだけ。教師は一步間違えば権力にな

りうる。書道を通して自分の美の基準、ものを見る眼と主体性、考える力を養ってほしかった」



新米の書道教師だった二十代後半から三十代前半。踏み固めた雪をキャンバスに、ススキの穂で作った筆で文字を書くパフォーマンスに挑み、周囲を驚かせた。テストの点数を付けないこともあった。初心を貫く型破りの教師だが、心の奥底では葛藤を抱え、悩んでいた。「書道という伝統芸術の厚い壁に体当たりし、もがいていた」。同僚の小澤が回想する。

「吾」という文字と格闘していたのは、ちょうどその頃だ。伝統と前衛、対立と和解、思想と実践……、さらに家族との確執も抱えていた。「吾」という作品には、揺れ動く植松の心の有り様が色濃く投影されている。

河はその「吾」に直感的に反応。自由闊達で絵画的な現代書に芸術性を感じ、惹かれた。河も二十代で人生の壁に突き当たった辛い過去があり、自身の想いも重ね合わせたのだろうか。河コレクシヨンのコンセプト「祈り」にも通じている。「哲学を共有した出会いだった」



植松の雅号は「峡山」。母校峡北高校と峡北地方の山々にちなんで名付けられた。

今年一月下旬、植松を育んだ峡北地方を訪ねた。四方を山で囲まれた甲府盆地。そんな中でも、残雪を頂いた甲斐駒ヶ岳がひとときわ輝いていた。山をこよなく愛した『日本百名山』の著者深田久弥が、「もし日本百名山を選べと言われたら、この山は落とさないだろう」と称賛した南アルプスの貴

公子だ。

「浅川巧は、親友柳宗悦に冠雪の甲斐駒ヶ岳や八ヶ岳を見せたくて、ちょうどこの時期に彼をふるさと山梨に招いたのです」。軽自動車のハンドルを握る植松が教えてくれた。



峡北地方にある教え子宅の玄関に植松の書が飾られている。南東の空を見上げると、甲斐駒ヶ岳が目に見え込んできた。壁には「駒ヶ嶽凍てて巖を落としけり」（前田普羅句）が書かれている。「どんな有名な先生に『自分の書を飾ってほしい』と頼まれても、お断りしますね」と教え子は誇らしげだった。

南アルプスが一望できる旅館「画家の宿 志満屋」（北杜市）にも、植松の書が数多く飾られている。屏風やふすまに書かれた「駒ヶ岳」「八ヶ岳」の文字。水墨画のような墨色の世界が、窓越しに広がる山々と重なり合い、語り合っているように感じられた。「風土に根ざした書です」。宿の主人は嬉しそうに語っていた。



植松が人生をかけて追いかけてきた「書とは」「書道教育とは」……。その一つの答えが「峡山」の書の中にあり、秀峰甲斐駒ヶ岳や八ヶ岳と共に清らかな光を放ち続けている。

二〇二二年四月

菊地正志（きくち・まさし） ジャーナリスト、埼玉新聞記者。埼玉新聞社編集局経済部長、文化くらし部長、編集委員などを歴任。一九五八年生まれ。さいたま市在住。

文は人なり 書も人なり

河 正雄

— 峽山先生との出会い —

「拝啓 謹賀新年、世の中が低迷しようが
 混沌としていようが、初春というものはなん
 となく希望を持ちたくなるから不思議です。
 正月も七日の松の内を過ぎるとまた、いつも
 の日常が始まります。」

さて小生、植松永雄と申しますが過日の小
 沢龍一さんの紹介で先生にお手紙を申し上
 げる次第です。

小生は高校の書道教員として三十七年間
 奉職したものです。授業の傍ら、自分の趣味
 としてからのものですが墨の文字、筆の文字
 の奥深さに魅せられています。紙の中に滲み
 込む墨の黒は絵の具の黒と違い、どこか厳か
 です。

五十年間の足跡といっても大したものでは
 ありませんが、作品を御高覧願えましたら
 光栄でございます。謹んで御案内申し上げま
 す。御多忙の中、日程が許されましたら会に
 御臨席賜れますれば無上の喜びでございます。
 意が尽せませんが御招待、御案内申し上

げます。 敬具 正月五日 植松永雄拝

二〇一〇年正月に書家峽山・植松永雄先生
 から上記の墨字の書信が届いた。その書信は
 芸術作品のようで「文は人なり、書もまた人な
 り」というが、書人峽山の人となりが見え
 られた。

その招待に応え、山梨県立美術館での「峽
 山 植松永雄 書五十年展」を観覧した。「吾」
 字、そして「母」字、「女」字が目にとまった。
 墨はエロティックであると図録で語られて
 おり、共感した。「○△□」字は私も作品を
 表したことがあるので、人生哲学を共有した
 出会いであった。絵画的、美術的な現代書に
 芸術性を感じ、派や流派に組みせぬ我が道を
 行く奔放自由闊達な世界である。私は作品の
 インスピレーションから、それらの作品をコ
 レクションした。そして韓国の霊岩郡立河正
 雄美術館に寄贈し収蔵された。

— 崔子玉座右銘 —

一九七〇年代、母と一緒に京都祇園祭を見
 学した。鉾屋台から数十個撒かれた粽を私は
 一つも取れなかったのだが、母はその縁起物
 を二つも取った。その足で宇治平等院へお参
 りに行った。

その時、寺の入り口にあった掲示板をなに
 げなく読んだ。崔子玉（西暦七七年〜一四二
 年 後漢時代の中国の儒家。名は瑗、子玉は

字）の座右であった。目を変え法隆寺を参拝
 したが、中宮寺門跡の掲示板でも同文を読ん
 だ。

その後、節分の日に高野山へ参拝に行った。
 根本大塔での法要の後に仏前のお供え物で
 あった高野山饅頭を頂いた。紅白の饅頭の美
 しさは忘れられぬ思い出である。

崔子玉座右銘を高野山開祖弘法大師空海
 （七七四年〜八三五年）が書き遺され、その
 書は重要文化財（財団法人大師会所蔵）とな
 っていることを金剛峯寺で知った。空海の書
 が二一世紀の今日にまで千二百年の時空を
 超え遺されている。自由闊達、のびやかな筆
 致は現代にも通じる書体で惚れ惚れする。

二〇一〇年始めに山梨県甲府市在住の書
 家、峽山・植松永雄先生の作品をコレクション
 する事となった。その時、先生に崔子玉座
 右銘の書を依頼した。しかし「恐れ多くて私
 の力ではとても及ばぬ」と応諾されなかった。
 諦めていた頃、数年経って「ようやく書く気
 になった」と書いて下さった。その間、先生
 は修行者になったと言われた。

その作品は二〇一八年九月二十五日、私の
 故郷である秋田県仙北市立角館町平福記念
 美術館に寄贈し収蔵された。

他人の短所欠点をそしり批難するもので
 はない。自分の長所を自慢し誇るものでもな
 い。恩を施した時はなるべく忘れるように努
 め、恩を受けた時はいつまでも忘れるような
 事があってはならない。水に流し石に刻む心
 である。

世間の名譽は慕うに足りないものであるから、ただ仁徳をこそ守り続けねばならぬ。じっくり考えて後に行動を起こし、人や世の悪口などは気にしない。

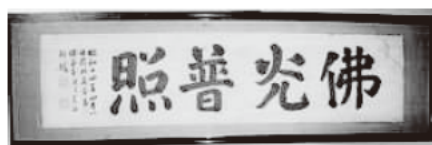
実質以上の評価を受けないように。賞の中に罰あり。愚を貫くことは聖人の認められたところである。黒く染められても黒くならないことこそ尊い。暗愚なる外見の内側に光明を含めよ。

柔弱こそは生きている者のあかし。老子は剛強を戒められた。勇気溢れる馬鹿な男は、一体どういうつもりだろう。

言葉を慎み飲食を節し、足るを知って災いに勝て。以上の事を常に守ってさえおれば、いつまでも芳しく薫り続けるであろう。

―桑原翠邦の書―

二〇一八年十月二十六日、甲府市の書家、峡山・植松永雄先生、妻と長女を連れ立って秋田県仙北市田沢湖田沢にある曹洞宗田沢寺参拝に赴いた。植松先生が「ふるさとを田沢と呼ばん彼岸花」という私の句を作品にされた。その句を刻んだ田沢寺の朝鮮人無縁の慰霊碑を現地で見たいということ訪問することとなったのだ。「寺を訪ね始めて深い意味を知りました。言葉を軽々しく書いてはいけないことを改めて認識しました」と述べられた。



桑原翠邦書「佛光普照」(秋田県仙北市の田沢寺)

田沢寺本堂で感動を以て「この度の秋田訪問は私の修学旅行である。ここに掲げられている『逸曳』署名の書は、桑原翠邦の弟子のような書風なのでびっくりした」と言った。そしてもう一枚の掲額、一九三九(昭和十四)年四月八日付「佛光(仏光)普照」の書に目をやり、再度びっくりされた。「この書は桑原翠邦の書である。現代書道の父と言われる比田井天来の弟子で四天王の一人である。天来の師法を受け継いでおり、東宮御所の御進講役を拝命された方の書である」と話された。

翠邦は一九三八年、天来が発起した大日本書道展で審査員に任命され、一九三九年には現代中国に古典筆法を教えるとの使命を受けて北京に渡り、赴任中に天来が急逝されたので天来の遺志を継いで書宗院を設立した。現在、桑原翠邦の長男、桑原千磨太(呂翁)が『書宗』誌で後進の指導をしており、田沢寺の書は、呂翁の弟子である宮崎逸曳氏(菅原宗弘現田沢寺住職は宮崎逸曳氏の従兄弟に当たる姻戚)が田沢寺に贈ったものだといふ。

「佛光普照」の翠邦の作品については田沢湖町に知人(不詳)がいらして、そ

の方に頼まれて書いた作品です。昭和四年(一九三九)年三月十五日に呂翁が生まれて間もない四月八日、降誕会の花まつりに北京で書いた作品です。多分、花まつりにお釈迦様への感謝でこの作品を書いたのでは。「佛光普照」の作品は田沢寺にあるのが相応しいと主人(呂翁)が説明してくれました。人の巡り会わせとは不思議ですね。

呂翁の奥様からのお手紙で由来が判り、北京時代の翠邦先生の様子は、小澤征爾氏の御母堂の著書『北京の碧い空』に記述があると植松先生から教わり、書の由来が分かった。私が生まれた昭和十四、北京で書かれた翠邦先生の書が田沢寺本堂に掲げられ、私と出会ったのは一九八〇年代の事である。書は歴史的文化財であるが、その時既に風雪で酷く傷んでいた。不幸であつた歴史を回顧し、この御縁を大事に共有したいと思い、修復への想いを発露した。

二〇一八年十一月五日、秋田市の木村表装店(木村明夫代表)へ依頼した。

富木弘一角館町平福記念美術館長より「良い仕事をしており当館もお願いしている」との紹介にてFAX致しました。写真の書「佛光普照」は一九三九年作の書で田沢寺本堂に掲げられております。私は田沢寺の檀家の者ではありません。田沢寺と御縁を頂いております関係で傷みがあり、あと何年ももたないとの見立てにより急を要しお願い致したく存

じます。額そのものは生かせれば活かし、表装を新たにしてお修復しなければと存じます。費用につきましては私が田沢寺様に喜捨しますので御請求して下さい。

翌日、応諾の電話があった。「私は河さんと同じ秋田工業高校の後輩で金属工学科の卒業生です。先輩の事は良く存じておりました」と思いがけない話をされ胸が熱くなった。私は各界で母校の卒業生が活躍していることは自覚していたが、後輩と田沢寺の寺宝を守る文化財修復事業を共に行える縁に大きな喜びを覚えた。

植松先生の教えを頂き、こうして「佛光普照」は甦った。「佛光普照(ぶつこうふしょう)とはどの様な意味なのか」と問い合わせを複数人から受けた。字の通り「仏の光は普く照らす」という意味だろうと答えている。

—露堂々—

二〇〇〇年一月一日のことである。智積院宮坂宥勝管主様との面談を終え、清水寺を参拝した。帰り道に三年坂(産寧坂)を下り、足が止まった。八坂神社に向かう道筋の懐石料亭前で打ち水をしていた京美人に、誘われるかの様に料亭に入った。

その料亭は著名な政治家、もしくは富豪が住まわれていたと思われる別荘のような建物であった。打水されていた石畳を踏み玄関

に入ると、掛けられていた書額に目が釘付けとなった。威風堂々、太字の二字だけの「露堂」と書かれていた。

私は『明歴々露堂々』という禅書ですね」と京美人に尋ねた。「この建物の主人が残された書で、お客様をお迎えしております」と答え、抹茶の応対を受けた。高校時代に読んだ「浅川巧さんを惜む」(安倍能成著)の文を噛み締め偲んだ。

「明歴歴露堂堂」とは禅林句集にある禅の教えの言葉である。「露」はあらわれる「堂堂」は隠さないさまである。即ち「明歴歴露堂堂」とは全ての存在は明らかに、全ての物事がはっきり現れ出ている様子である。ありのままの全てが真理であり、大意は一点隠す所も無く表れるということである。

人生においても執らわれず、焦らず、気取らず、誤魔化さず、素直でありのままに堂々と生きたいものである。自分を飾れば不自然であり、虚勢を張って強く見せ、偉ぶれば無理がいく。無理を通せば道理が引つ込む。必要以上に謙虚になる事も無用だということである。

神仏に頂いた、与えられた立場や環境の中で共にあって隠す事無く、堂々と生きようとするところに、この言葉の意味がある。

浅川巧は山梨県立農林学校を卒業して、秋田県大館営林署で造林技師として四年間務めた。後に兄伯教と相前後して朝鮮に渡り、農林技術の普及に努める。傍ら失われようとする朝鮮の美の発掘に献身し、後の柳宗悦を

開花させた民芸運動の先駆者である。

植民地支配下にあった朝鮮に生きて朝鮮の人々から愛された稀有の日本人である。巧の生涯は「人間の価値」が実に人間にあり、それより多くでも少なくでもないことを生が示した国際人である。私は在日の生を巧のように生きたいと念じた。

韓国では韓国人に墓は守られ、地元山梨県北杜市でも顕彰され、両国から愛されている人物でありながら、顕彰碑が建立されていない事を長年淋しく思っていた。二〇二一年は私が敬愛する浅川巧の生誕百三十周年没後九十周年記念の年に当たった。

二十数年間、石に刻みブロンズ像を配し北杜市に顕彰碑を贈ろうと構想を温めていた。私は二〇二一年六月十三日、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会結成二十五周年を記念して、「捧ぐ 敬愛と感謝を込めて」と、私の座右である「露堂堂」の碑文を刻み、兄弟のブロンズレリーフの顕彰碑を生誕地に建立するに至った。碑文は甲府市の書家・峡山植松水雄先生の揮毫による書「露堂堂」である。

河正雄 (ハ・ジョンウン)

韓国・光州市立美術館名誉館長。美術コレクター。(詳しいプロフィールは本書69頁の「河正雄コレクションとは」参照)

峽山書について

辱知 中込 蘇

書は技術を磨くばかりではなく理論を学ばなければいけない。技術は「線質」で理論は「構成」である、というのが自論である。書いて書いて書きまくり、技術を高くする技術先行型、技術の高いものをウマイと言うので、現代の書道界はウマイ字が盛行している。尤もそれから殆んどは師風墨守で、似通った風の林立だが、他の世界ではそれらは盗作と称される。書道界は摩訶不思議な世界でもある。

そんな技術一辺倒がひしめき合う斯界だが、いくらウマくても理論が伴わなければ良いものとは言えない。例えば家を建てるに、相当技術の高い工匠が請け負っても、設計図が良くなければ満足した家が建たないのは当然である。書で設計図に当たるのが構成だ。その構成を学ぶには篆刻の印稿でしかないと思っている。

ところが、書には不思議と書き手の気分みたいなものが投影されることも事実であり、特に日本では心とか魂とか精神論的な見方を重んずる人は多い。峽山書もどちらかと言う

と「書は心画なり」の世界であろう。書家の技術をひけらかす書でもなく、ただ好きな書を無欲恬淡に筆を運ばせている、そんな感じに思えてならない。しかし峽山書に見えるのはそればかりではないことも確かであり、考えれば経験が味付けをしているのではなからうか。若き頃より書が好きであるが為に、食欲に模索して来て今がある。

書の道は高校の書道部を端に発し、二松学舎での恩師石橋犀水の影響により様々な体験を積み、同時に学友小澤正氏も忘れてはならぬ存在となった。従兄弟である指揮者小澤征爾氏が「ピアノを弾きっぱなしで十一時間目に倒れた」という話を聞き、触発されて「書きっぱなし十二時間」を目標に実行したのである。すると一時間程で尻が痛くなり、二時間程で背中が痛く、五時間過ぎると痛さは麻痺、その後指・腕・首・肩全てが痛くなり、最後は筆を指から離すのが一苦労であったなどと実体験をしている。学生時になせる経験ではあるが、熱意はその後の教職中にも衰えず今に続いている。現在遷生の機関誌に執筆戴いているが、所謂峽山回顧で、始まったばかりだが石橋犀水・森田子龍・篠田桃紅・墨・硯等を挙げ、これから一層楽しみにしている。

と、前置きが長くなったが、書について述べなければいけない。二〇一〇年一月末、山梨県立美術館で開催した『峽山・植松永雄 書五十年展』の作品集に「峽山書は巧拙で見たらいい

ない、手本にしてもいけない、本人自身である」と稿を起こした。作品を見れば楽しげなものの数が多いが、作者は苦勞して喘いでいるはずだ。これも「苦あれば樂あり」と言うものであるうか。

「東江句」の短冊も楽しげだ。書風としては「春霞丸い地球の…」の揺さぶりは清水公照の自在か、「安行路空染め…」は中川一政のくのぼうにも見え、「ふるさとを田沢と呼ばん…」は、上田桑鳩の弾みみたいなものが垣間見えて来る。コピーでよくは判らないが墨色の妙味も感じられる。老子の言に「大巧拙なるが若し」とあるが、これら書が本当の大巧なのか拙なのか、拙に見えることには違いない。しかし、人柄の良さが感じられることは字・明の理であろう。

二〇二〇年九月

中込蘇（なかごみ かず）

蕩墨（とうぼく）書道會代表。封山印會・毎日書道會所屬。山梨篆刻協會副理事長。山梨県立大学非常勤講師（書）。書道機関誌『フットステップ』発行。著書に『百選論語墨場必携』『こころとし』『こころばかり』『足達齋展』『松浦圭言とその周辺』『渡邊青洲の書畫・遺品展』『富岡敬明と従弟中林梧竹』『甲斐の三筆展』『漢詩人 笠井南邨』他。一九五三年山梨県八代町生まれ。

植松峽山を励ます

小澤 龍一

かつて奈良に旅した折、空海の肉筆の写経を目にし、その厳しき書体に驚愕した。

死を覚悟で日本文化を築いて来た先人達の意気込みと、その思想は、一字一画の中に組み込まれ、脈脈と今日まで息吹いている。

あの細い毛筆の先からとぎすまされた鋭さと、強靱さを有したそれは、可憐に流れる私達の全生活を射る眼光でもあろうか。

峽山、こと植松永雄氏とぼくは高校時代以来のつきあいである。ある時は、雪原に紙にみたて二人で墨汁で、地球に若き情熱を表現した事もある。

それは今から考えると遊びの一コマでしかなかったかもしれない。

またある時は、仙厓について朝まで語り合った事もある。それは仙厓の書を通して、彼の思想、生き方に感銘したからである。

彼の生き方の中には、あの若き日に語り合った仙厓がまだ生きている様にぼくには思える。飄々、淡々とした中に、自己をさらけだしてやまぬ氏は、取り引きとか、策略的人間関係を全的にきらい、「表も裏もない」「俺は俺でしかない」と言いきる子供的人間である。

ぼくは、そのような植松永雄が好きだ。

ぼくは、ぼく達の年齢が完熟の年齢ではないように、まだ描ききれていない未熟さを有しているかもしれない。しかし、二十年間、ひたすら求め続けた軌跡を、今、ここに表現する事によって、彼のさらなる成長を願うのはぼくだけではあるまい。

(一九八三年四月、植松永雄・教壇二十周年記念展のあいさつ文)

おざわ・りゅういち 一九四〇年生まれ。元高校教諭。公益財団法人やまなし文化学習協会生涯学習推進センター所長、山梨県立総合教育センター所長、私塾清里銀河塾・塾長代理、小説『白磁の人』映画製作委員会事務局長などを歴任。『山梨の自然と人』(全六巻)刊行。著書に『道・白磁の人 浅川巧の生涯』。



「〇△□図」(仙厓) = 出光美術館蔵

仙厓義梵(せんがい・ぎぼん) 江戸時代の臨済宗古月派の禅僧、画家。禅味溢れる絵画で知られる。代表作の一つが「〇△□図」(出光美術館蔵)。寛延三年(一九七五年)四月―天保八年一〇月七日(一九八三年一月四日) Ⅱフリー百科事典「ウィキペディア」より

植松永雄の書

—河正雄コレクションより



(韓国・霊岩郡立河正雄美術館所蔵)

吾

1



女子

2

(韓国・靈岩郡立河正雄美術館所蔵)



(韓国・靈岩郡立河正雄美術館所蔵)

女子

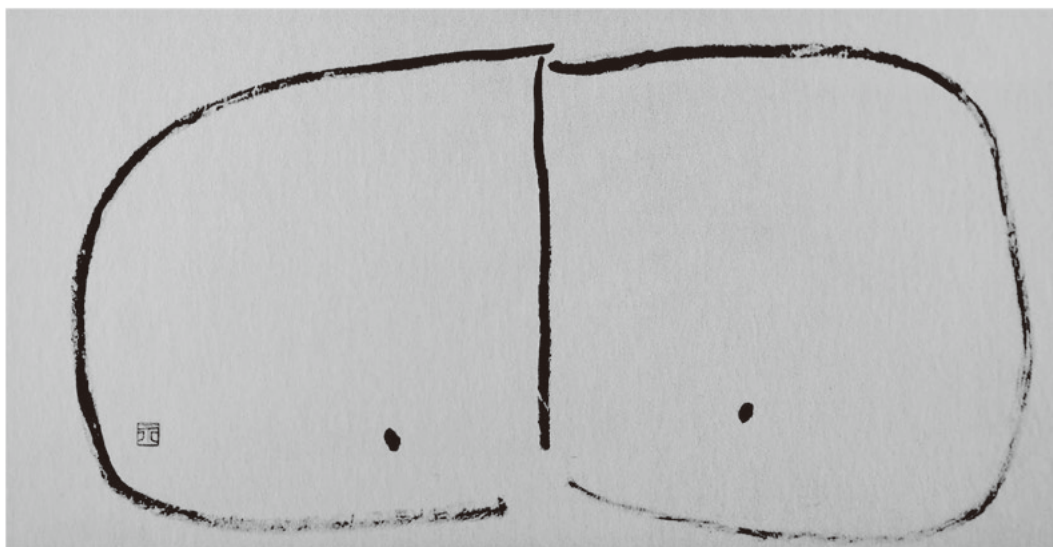
3



(韓国・靈岩郡立河正雄美術館所蔵)

吾

4



(韓国・靈岩郡立河正雄美術館所蔵)

母

5



(韓国・靈岩郡立河正雄美術館所蔵)

岳

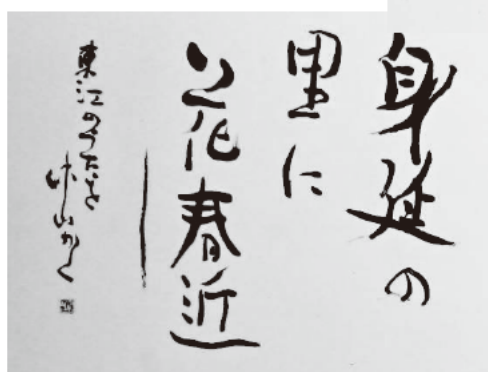
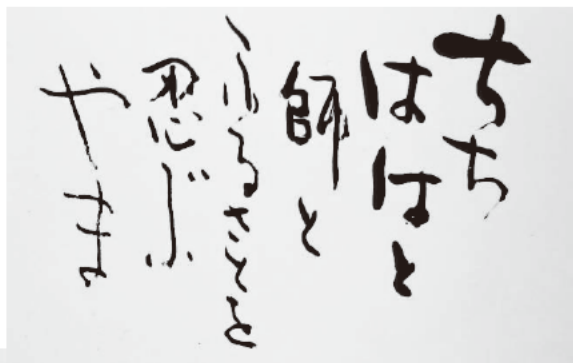
6



7

東江 河正雄作・俳句

(秋田県仙北市田沢湖畔・「ふるさとの碑」)



8

東江 河正雄作・短歌

(身延山 松井坊所藏)



月出山

9

(第72回山梨書道協會展・令和3年)



2018年10月27日

1
0

崔子玉座右銘

施人慎勿念受施慎勿忘
人に施しては慎んで念うことなかれ
施しを受けては慎んで忘るることなかれ

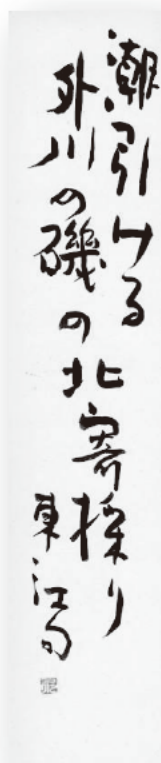
(仙北市立角館町平福記念美術館所蔵)

河正雄×植松永雄

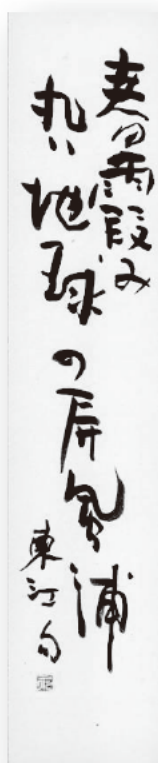
— 東江作 峽山書 俳句と短歌 —

俳句

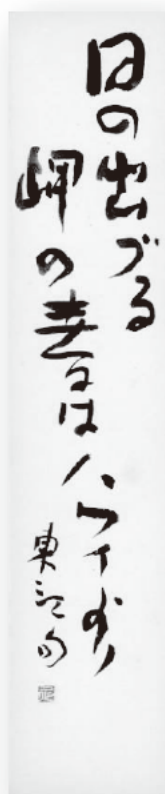
東江 河 正雄 作
峡山 植松永雄 書



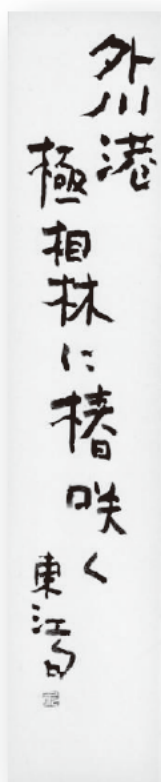
俳句 2



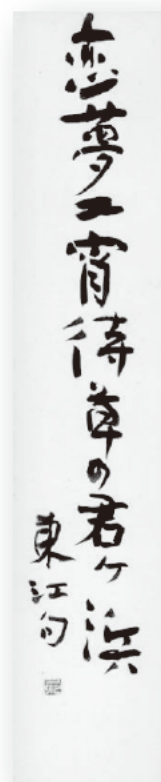
俳句 1



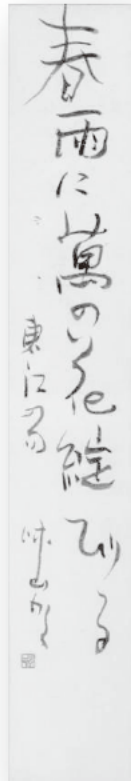
俳句 5



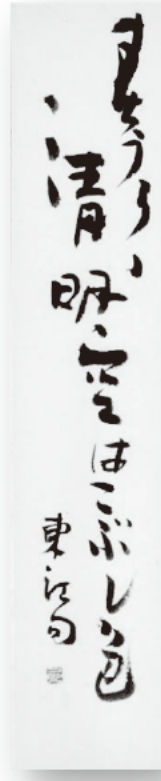
俳句 4



俳句 3



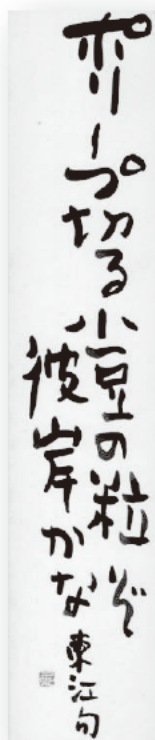
俳句 8



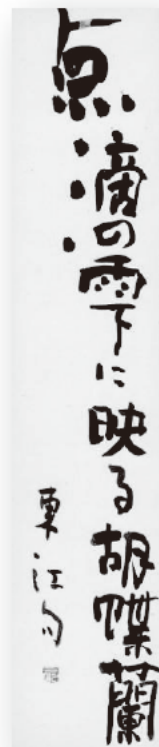
俳句 7



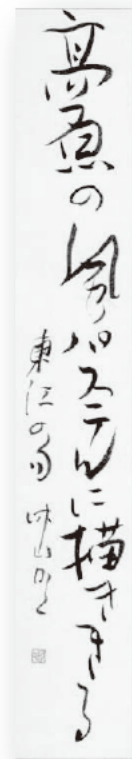
俳句 6



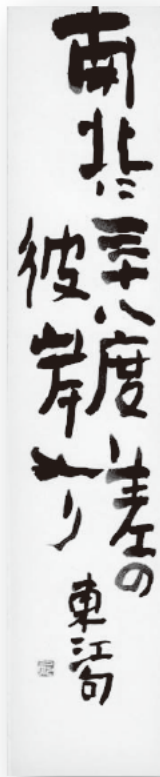
俳句 11



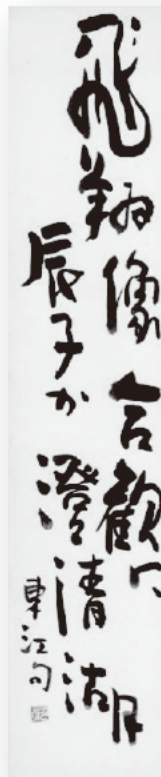
俳句 10



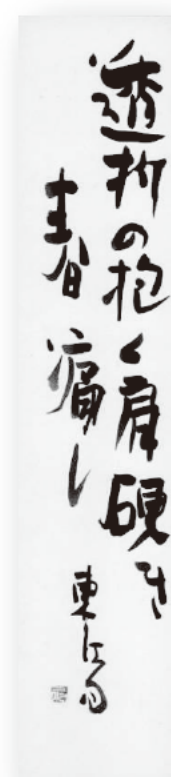
俳句 9



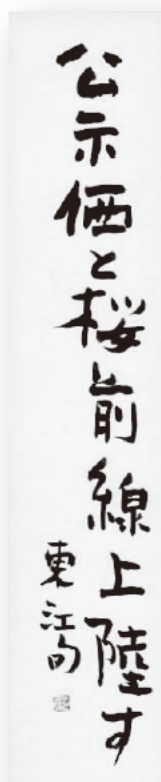
俳句 14



俳句 13



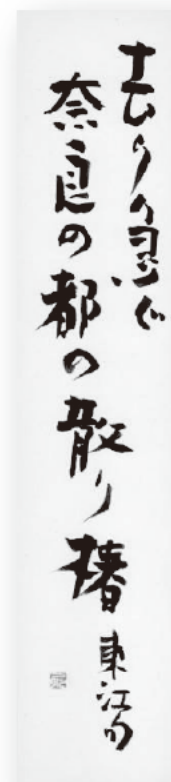
俳句 12



俳句 17



俳句 16



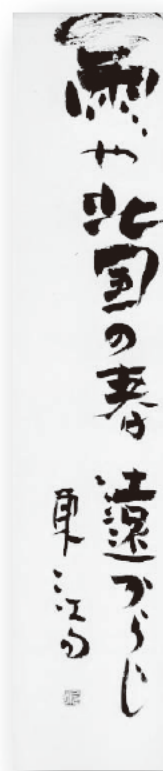
俳句 15



俳句 20



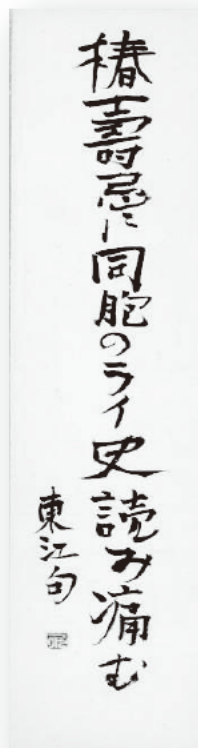
俳句 19



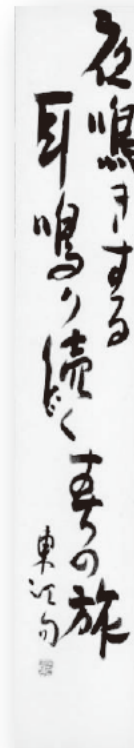
俳句 18



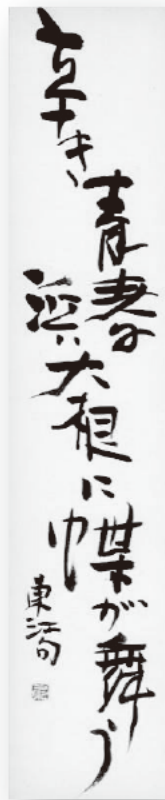
俳句 23



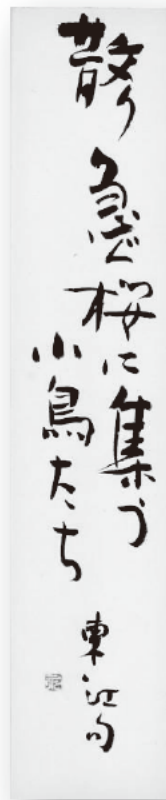
俳句 22



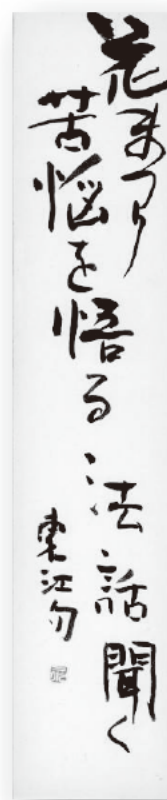
俳句 21



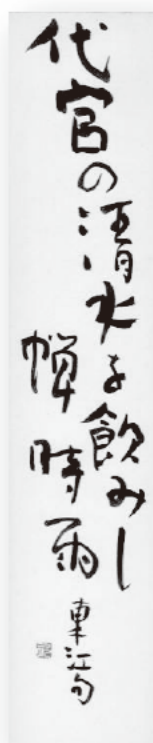
俳句 26



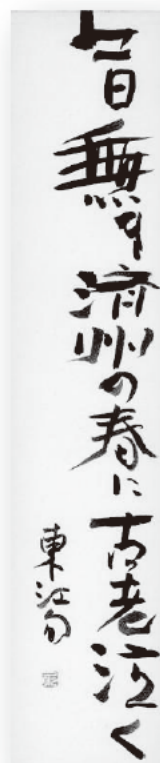
俳句 25



俳句 24



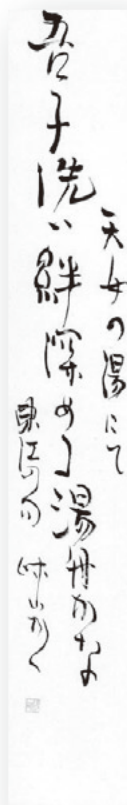
俳句 29



俳句 28



俳句 27



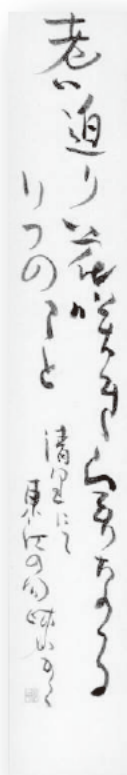
俳句 32



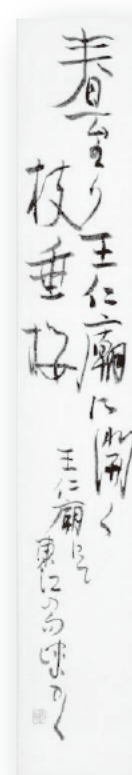
俳句 31



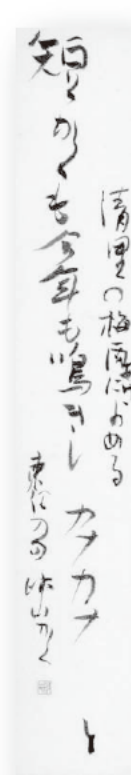
俳句 30



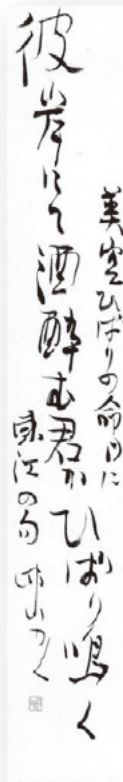
俳句 35



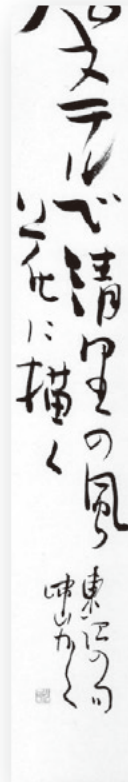
俳句 34



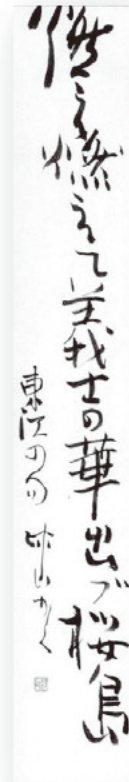
俳句 33



俳句 38



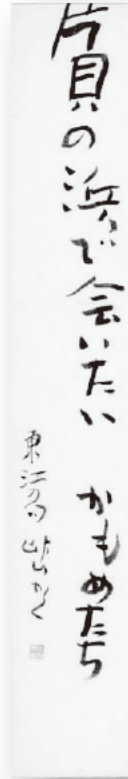
俳句 37



俳句 36



俳句 41



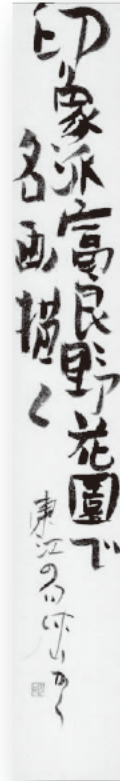
俳句 40



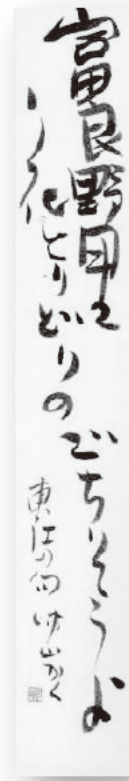
俳句 39



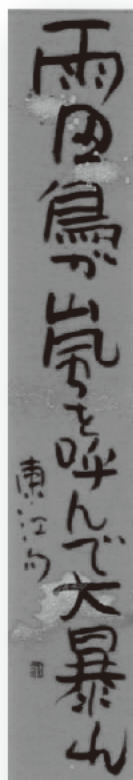
俳句 44



俳句 43



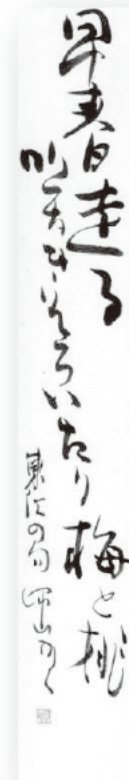
俳句 42



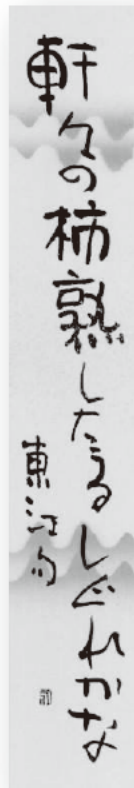
俳句 47



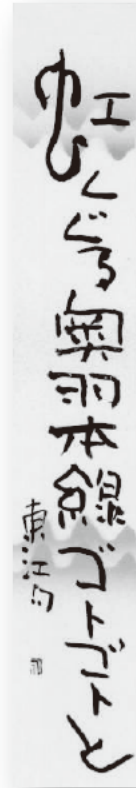
俳句 46



俳句 45



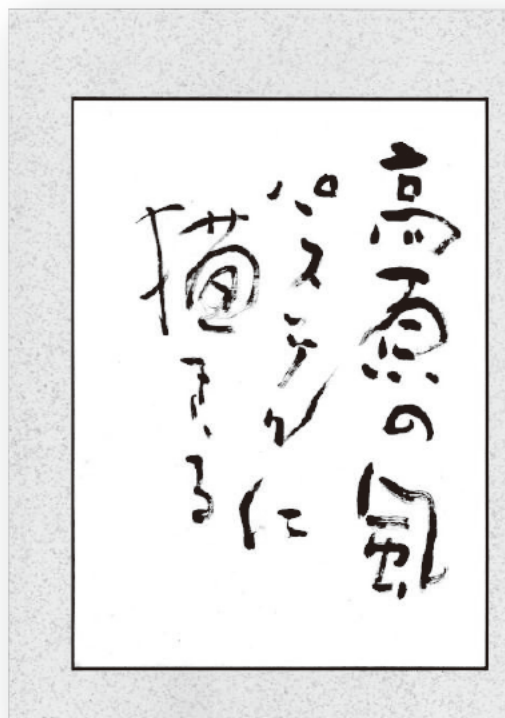
俳句 50



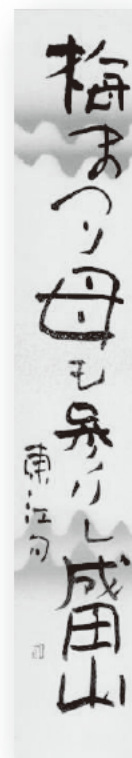
俳句 49



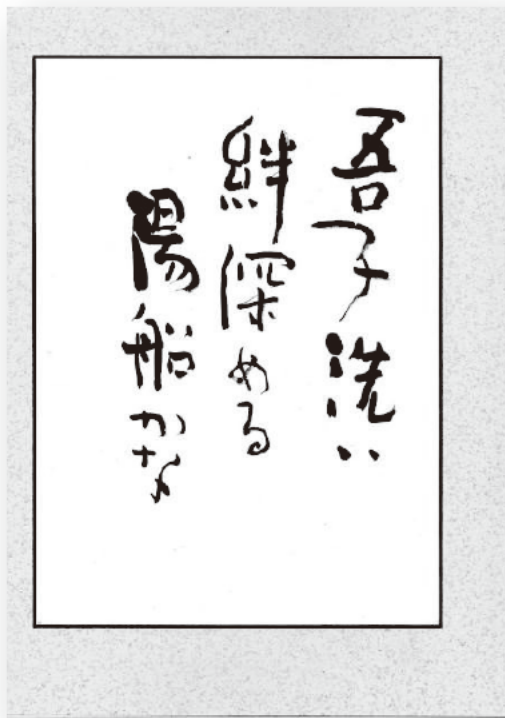
俳句 48



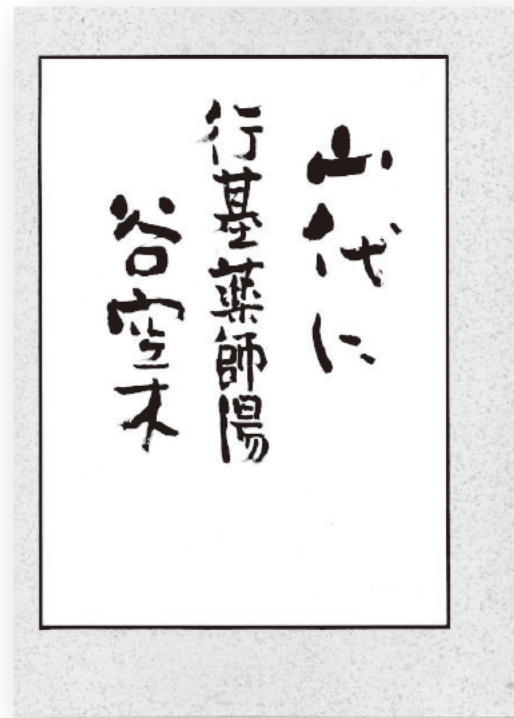
俳句 52



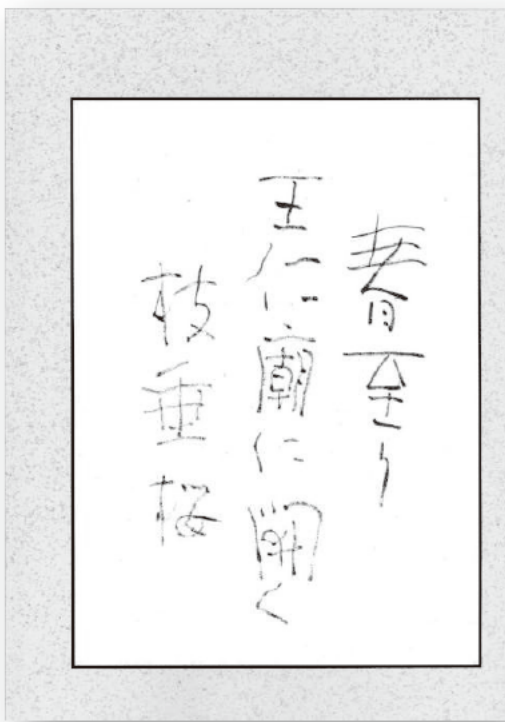
俳句 51



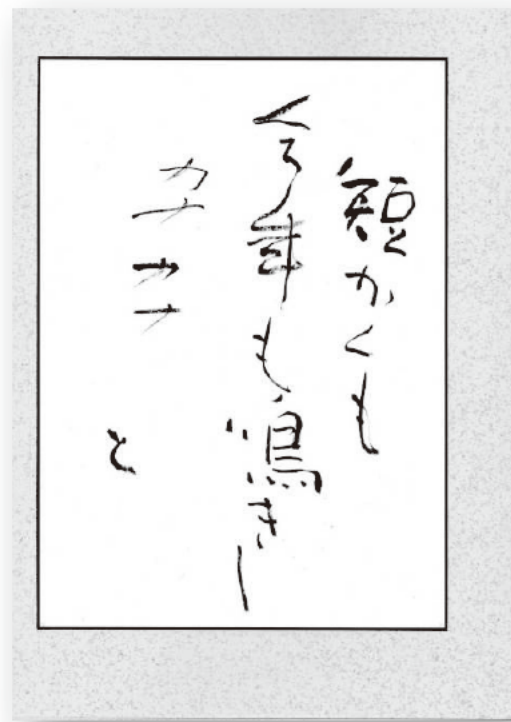
俳句 54



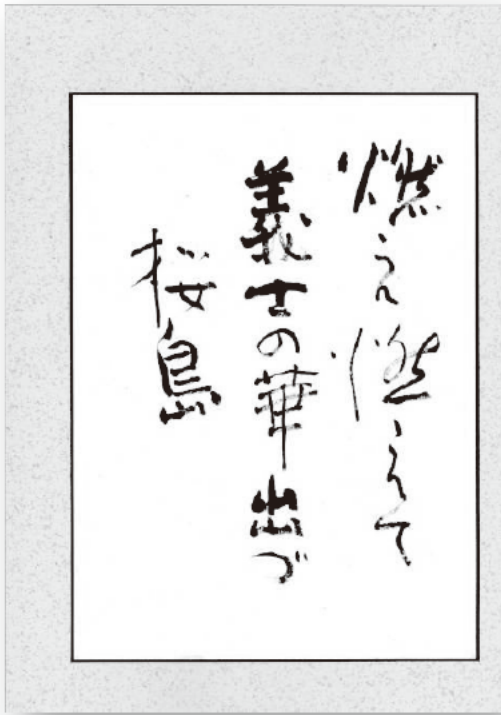
俳句 53



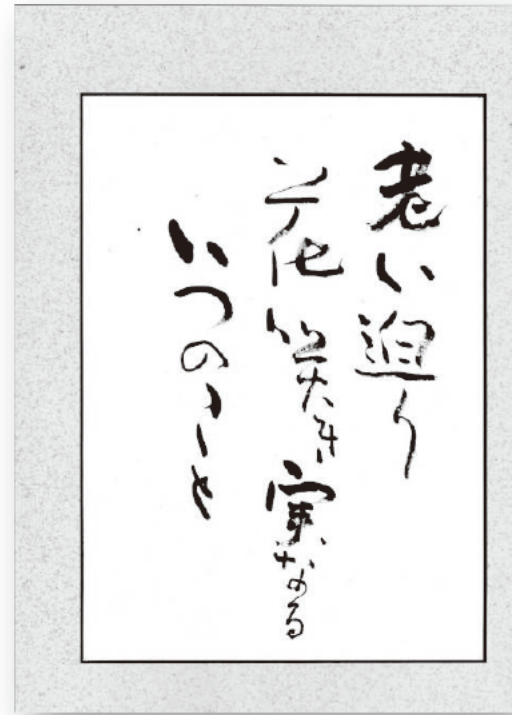
俳句 56



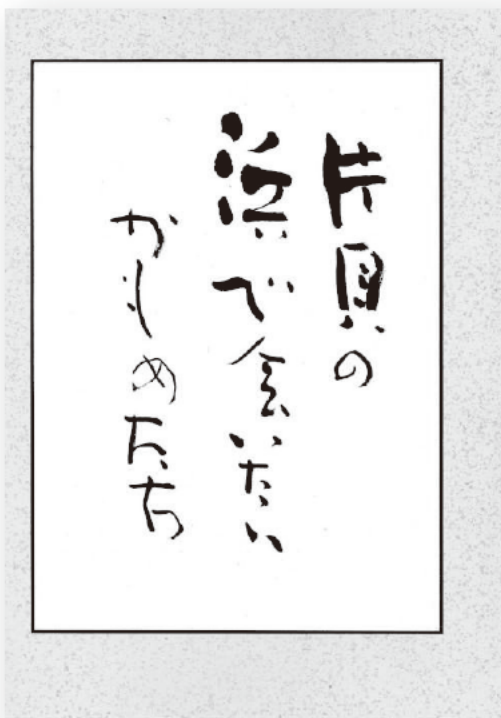
俳句 55



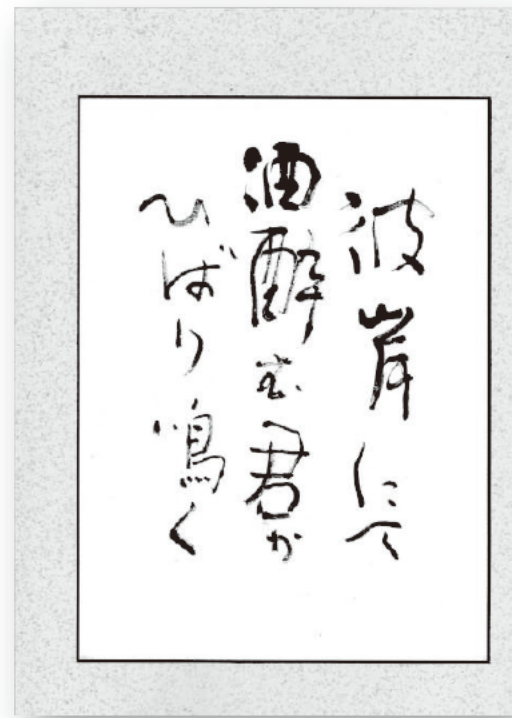
俳句 58



俳句 57



俳句 60



俳句 59

河正雄の俳句

一九九一年四月五日 七句

霞みけり丸い地球の屏風浦

潮引ける外川の磯の北寄採り

ほつき

(評) 「潮引ける」、情景をよく捉えている。

恋夢二宵待草の君ヶ浜

※「恋夢二」は恋多き夢二

外川港極相林に椿咲く

きよくそくりん

※「極相林」は植物群落が大きくなった森林

日の出づる岬の春はハワイより

犬吠の牧水碑読む春波濤

はとう

春うらら清明の空こぶし色

春雨に万の花は綻びる

一九九一年四月七日

高原の風。パステルに描ききる

一九八六年夏 清里

点滴の雫に映る胡蝶蘭

ポリープ切る小豆^{あずき}の粒ぞ彼岸かな

(評) 摘出したポリープは小豆の粒くらいの大き
さであったのだ。

透析の抱く肩硬き春痛し

台湾・澄清湖

飛翔像合歓に辰子か澄清湖^{ちようせい}

南北に三十八度差の波岸入り

伝香寺

散り急ぐ奈良の都の散り椿

安行の空染め香る梅や桃

公示価と桜前線上陸す

一雨や北国に春遠からじ

武蔵野の五月風切るサイクリング

(評) 心地良さが伝わってくる。

ふるさとを田沢と呼ばん彼岸花

※田沢は秋田県田沢湖

夜鳴きする耳鳴り続く春の旅

ちんじゅ

椿寿忌に同胞のライ史痛ましき

※椿寿忌は多磨全生園の追悼式

きさかた

象潟に芭蕉の寒し雪囲い

花まつり苦悩を悟る法話聞く

散り急ぐ桜に集う小鳥たち

辛き青春浜大根に蝶が舞う

飛驒の春告ぐからくりの三番叟

昔無き濟州の春に古老泣く

代官の清水を飲めり蟬時雨

二〇〇五年九月三日 木曾福島二句 山村代官屋敷の門前

初恋の調べなりけり虫の声

陳昌鉉先生縁の初恋の小道

山代に行基薬師湯谷空木

二〇一五年五月七日 加賀山代温泉
たにうつぎ

吾子洗い絆深める湯船かな

二〇一五年七月一九日 清里・天女の湯

短くも今年も鳴きしカナカナと

二〇一五年七月一九日 清里の梅雨明け

春至り王仁廟に咲く枝垂桜

二〇一六年四月七日 王仁廟
わにびよう

しだれざくら

老い迫り花咲き実なるいつのこと

二〇一六年四月一五日 清里

燃え燃えて義士の華出づ桜島

二〇一六年五月二四日

※義士は明治維新に活躍した人たち

パステルで清里の風花に描く

二〇一五年六月二〇日

彼岸にて酒に酔う君ひばり鳴く

二〇一五年六月二二日 美空ひばり命日

ひまわりが退く君に垂れている

二〇一六年七月一七日

二〇一六年一〇月一日

かたがい

片貝の浜で会いたいかもめたち

二〇一八年七月一八日 富良野 四句

ラベンダーに面影重ねひと偲ぶ

とりどりの花のごちそう富良野かな

富良野にて名画を描く印象派

(評) 作者が印象派になったつもりで富良野を描いている。

天国は富良野の丘の花の波

(評) 「富良野の丘の花の波」を「天国」と捉えている。

二〇二〇年二月二〇日 見沼通船堀

春競い咲きそろいたる梅と桃

二〇二〇年四月一〇日 川口・木曾呂の見沼用水

山桜夕日に映えて舞い散れり

二〇二〇年八月一三日

雷鳥が嵐を呼んで大暴れ

二〇二〇年九月二日 礼文島

かもめ群れにしんが来たと古舟
こたん
湧く

二〇二〇年一月九日 横堀駅 二句

虹くぐる奥羽本線ゴトゴトと

（評）「虹くぐる」から情景が浮かんでくる。「ゴトゴト」から懐かしさが感じられる。

軒々の柿熟したるしぐれかな

二〇二二年二月三日
梅まつり母も参りし成田山

美の探求と人情味

〔河 正雄の俳句〕

内野 修

高原の風。パステルに描ききる

「高原の風」から、風に吹かれて動いている、動きのある美しい風景が浮かんでくる。その風景を作者はパステルによって、描ききったのである。「描ききる」に満足感が感じられる。

点滴の雫に映る胡蝶蘭

作者がポリープの摘出手術を受けた時の句である。「点滴の雫」に閉じ込められた「胡蝶蘭」の花が捉えられている。写真の接写の手法によって、「胡蝶蘭」のあでやかさが捉えられている。

散り急ぐ桜に集う小鳥たち

「散り急ぐ桜」に「桜に集う小鳥たち」が取り合わせられている。はかないから美しさを感じさせる桜に対して、にぎやかに飛び交う小鳥たちが取り合わせられている。自然のひとこまが一句に凝縮されている。

とりどりの花のごちそう富良野かな

富良野のいろいろな花を「とりどりの花のごちそう」と見立てたところがおもしろい。花々に対する親近感が感じられる。

山桜夕日に映えて舞い散れり

「夕日に映えて舞い散れり」と言ったところ、「山桜」の美しさが捉えられている。美しさと同時にほかなさも感じられる。

以上五句から、作者の美への探究心が感じられる。

花まつり苦悩を悟る法話聞く

「花まつり」のひとつまが「苦悩を悟る法話聞く」と捉えられている。「法話」を「苦悩を悟る法話」と言い、作者の人生と重ねているのであろう。

辛き青春浜大根に蝶が舞う

浜大根の花に舞う蝶に作者自身の青春を重ね、「辛き青春」を振り返っているのである。

老い迫り花咲き実なるいつのこと

「老い迫り」と言い、「花咲き実なるいつのこと」と言って、作者自身の人生を謙虚に振り返っているのである。

以上三句から、時々立ち止まって、人生を振り返る作者の姿が浮かび上がる。

昔無き済州の春に古老泣く

「昔無き」と言って、泣く「古老」の悲しみが伝わってくる。

吾子洗い絆深める湯船かな

「吾子洗い絆深める」と言ったところ、「吾子」への深い愛が感じられる。

ひまわりが退く君に垂れている

「ひまわり」を「退く君に垂れている」と感じたところ、「退く君」に対する強い思いが感じられる。

ラベンダーに面影重ねひと偲ぶ

「ラベンダー」の花や香りに「ひと」の面影を重ね、その「ひと」を偲んでいるのである。その「ひと」への深い思いが感じられる。

かもめ群れにしんが来たと古舟湧く

かもめが群れて飛んでいるのを見て、にしんが来たことを知った礼文島の漁師たちの喜びが「古舟湧く」と言ったところから伝わってくる。

梅まつり母も参りし成田山

成田山の梅まつりに行った時に、昔、一緒に参った「母」の姿が浮かび上がったのであろう。「母」への思いが感じられる。

以上六句、人への思いが感じられる。そこから、作者の深い人情味があふれてくる。作者の目に人に対する温かい涙がにじんでくるのが感じられる。

(二〇二二年一月二八日)

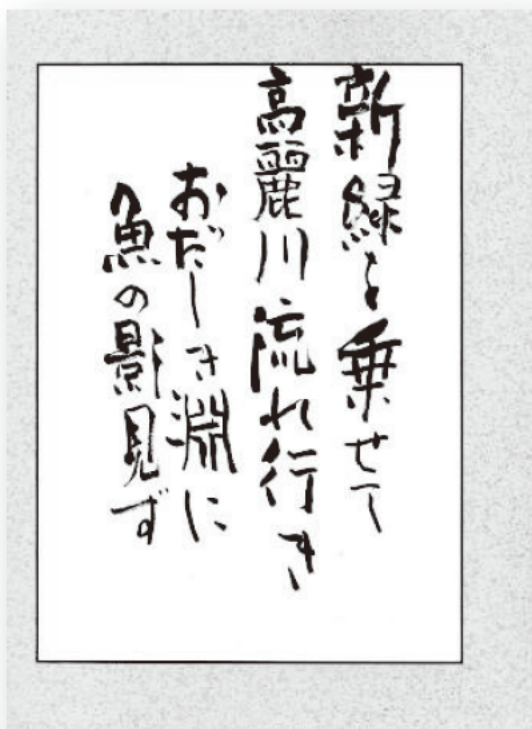
筆者略歴

内野 修 (うちの・おさむ)

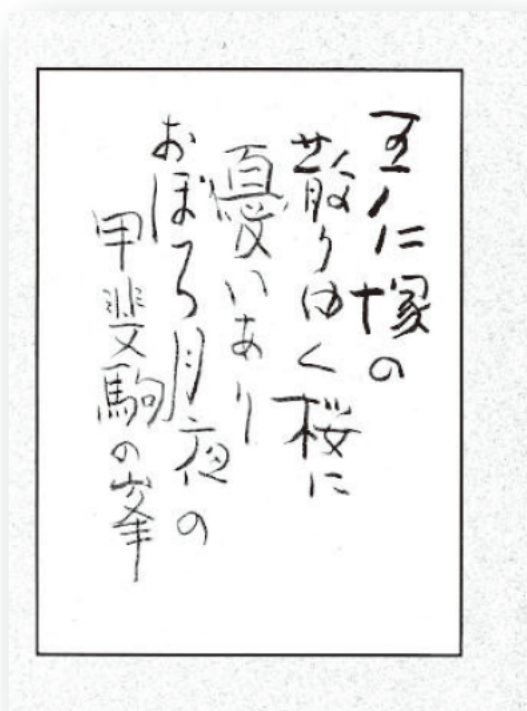
一九四三(昭和一八)年五月三〇日、埼玉県大里郡妻沼町(現在の熊谷市)生まれ。金子兜太主宰の俳誌「海程」(二〇一八年七月終刊)の元同人。現代俳句協会会員。埼玉俳壇選者。NHK学園俳句講座講師。東京教育大学文学部文学科国語学国文学専攻卒。埼玉県立不動岡高校、同熊谷女子高校、同熊谷農業高校、同行田進修館高校の教諭を歴任。句集『単発機』『直登』『風あり』

短歌

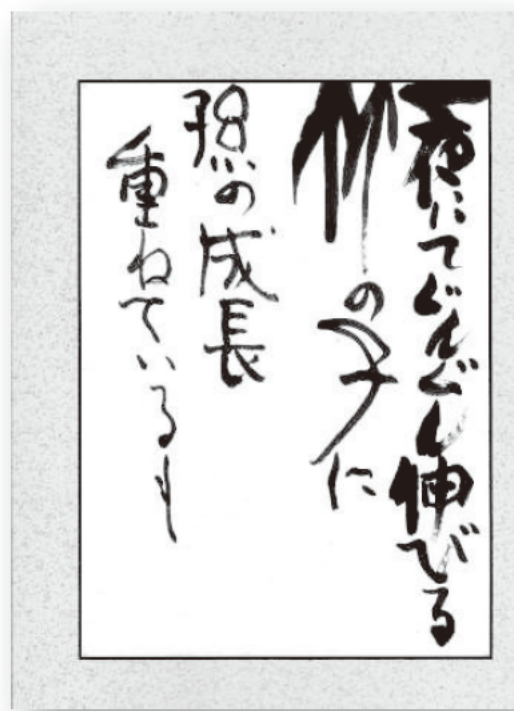
東江 河 正雄 作
 峡山 植松永雄 書



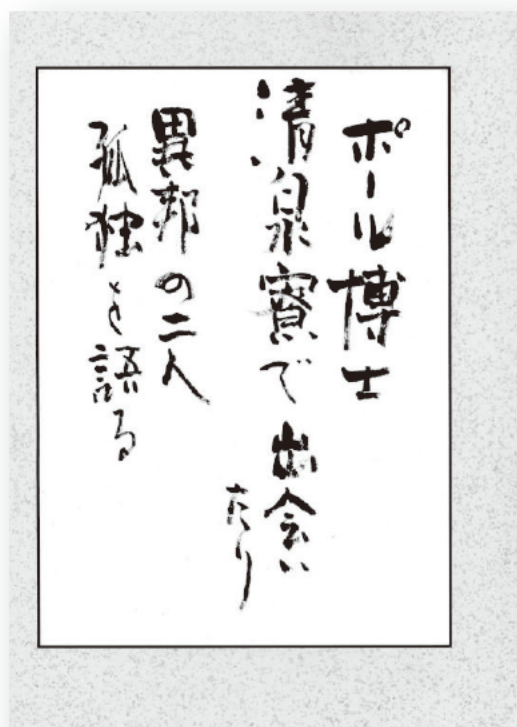
短歌 1



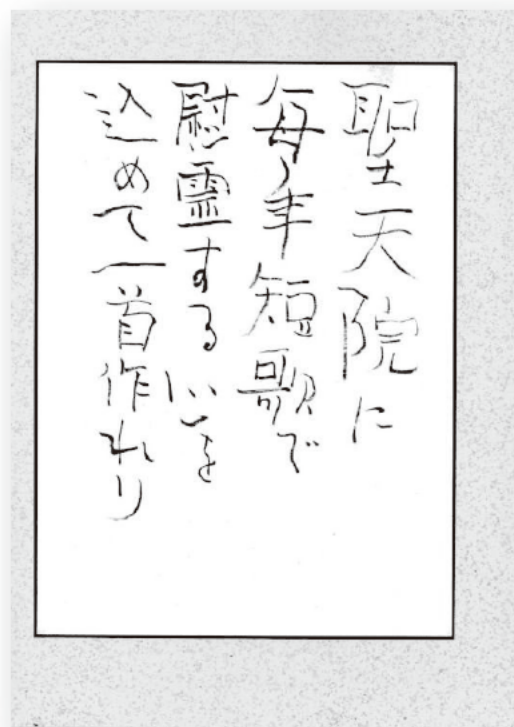
短歌 3



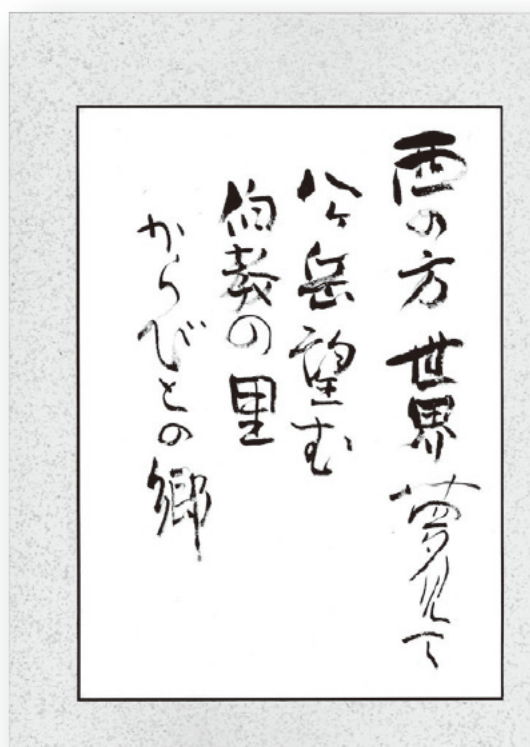
短歌 2



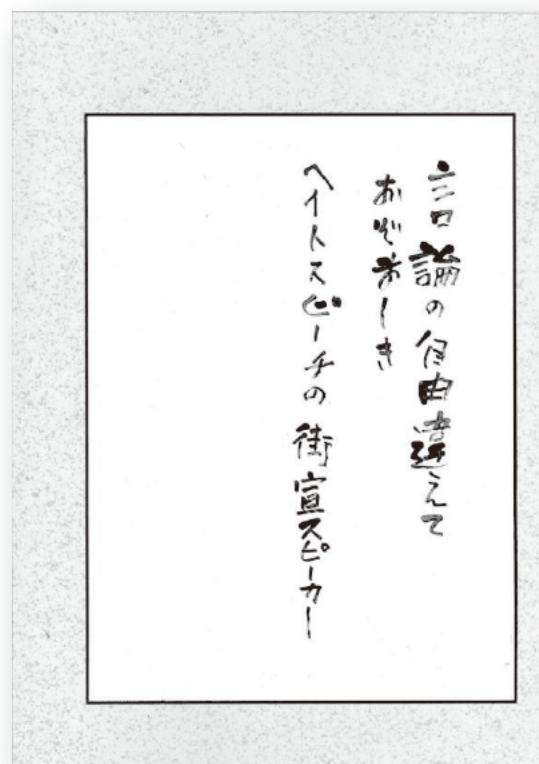
短歌 5



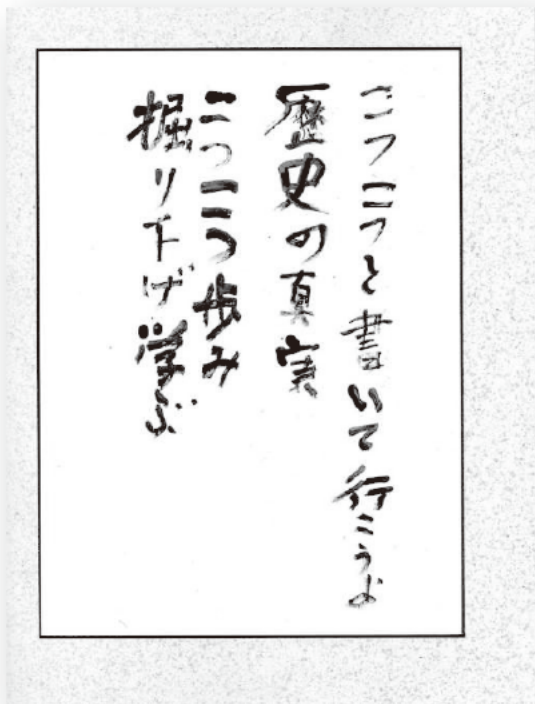
短歌 4



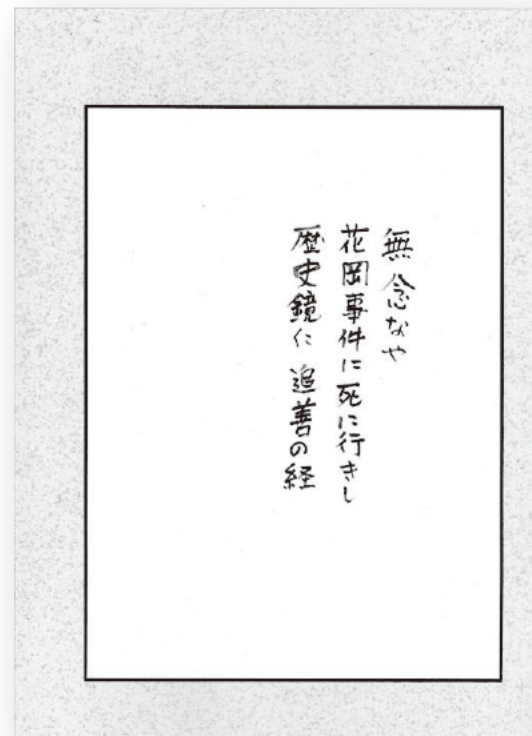
短歌 7



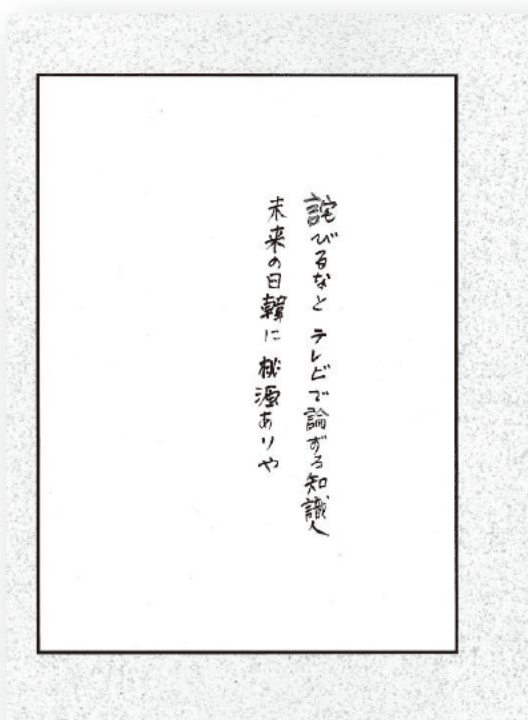
短歌 6



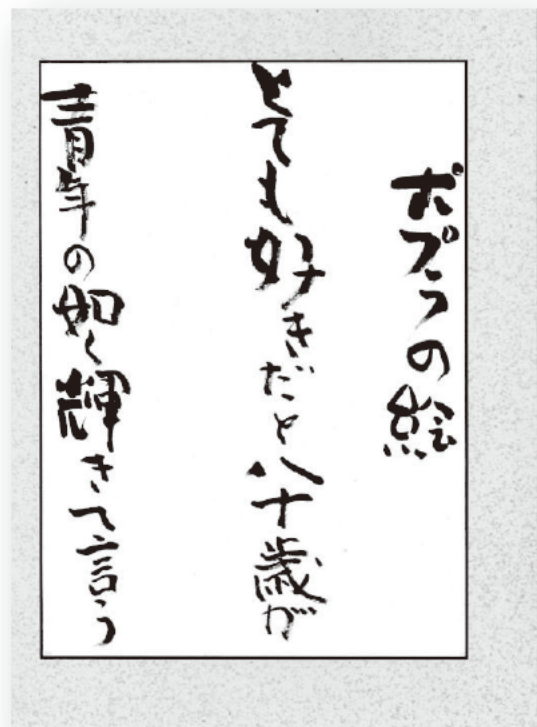
短歌 9



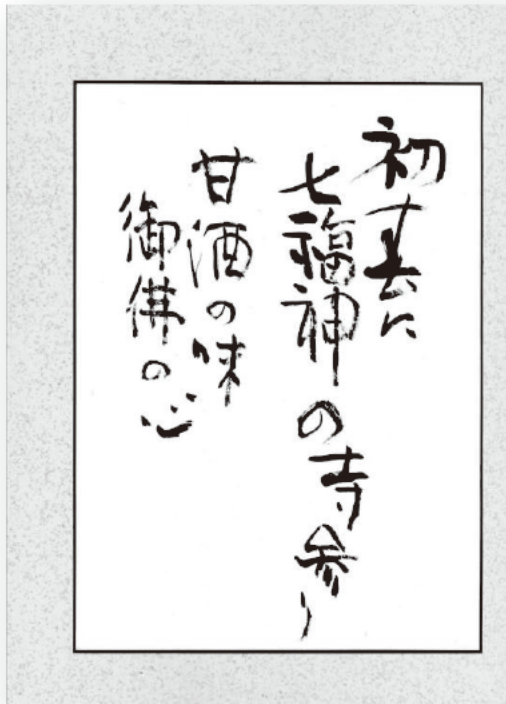
短歌 8



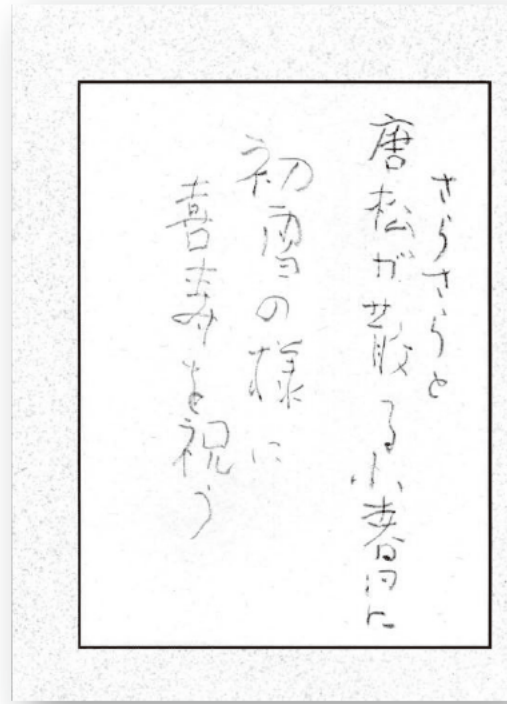
短歌 11



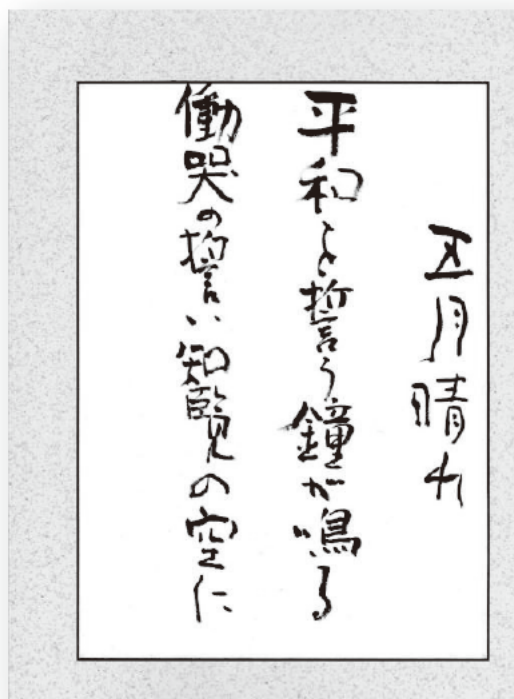
短歌 10



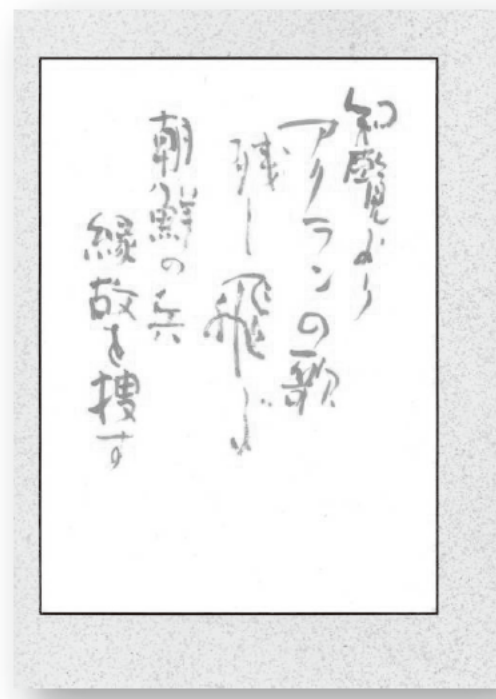
短歌 13



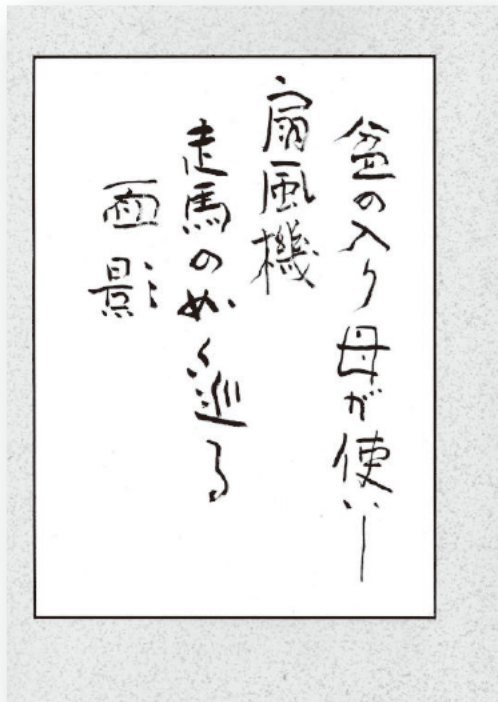
短歌 12



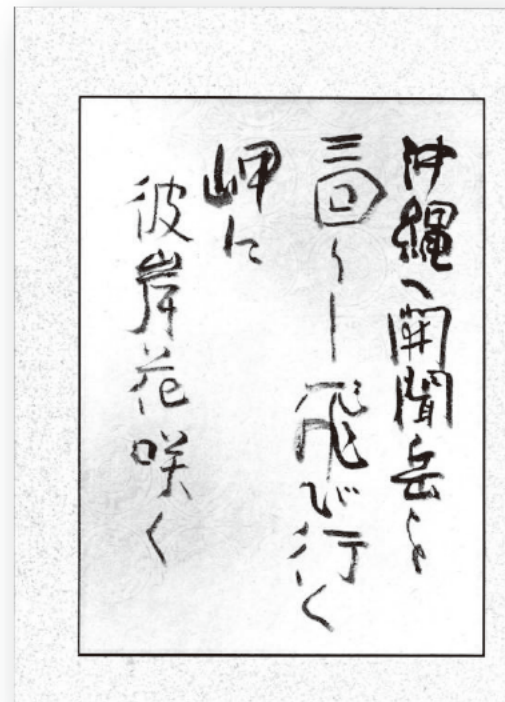
短歌 15



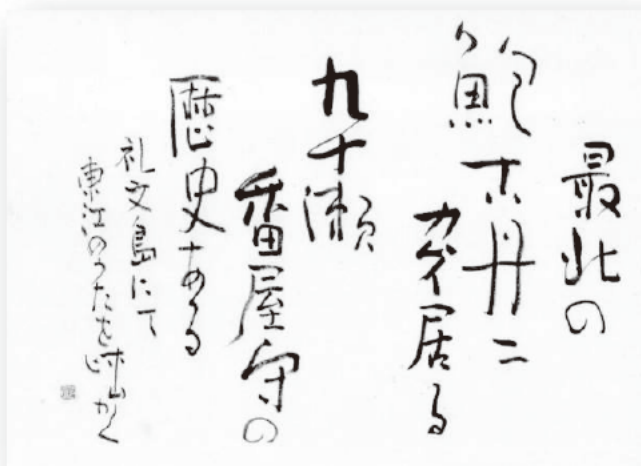
短歌 14



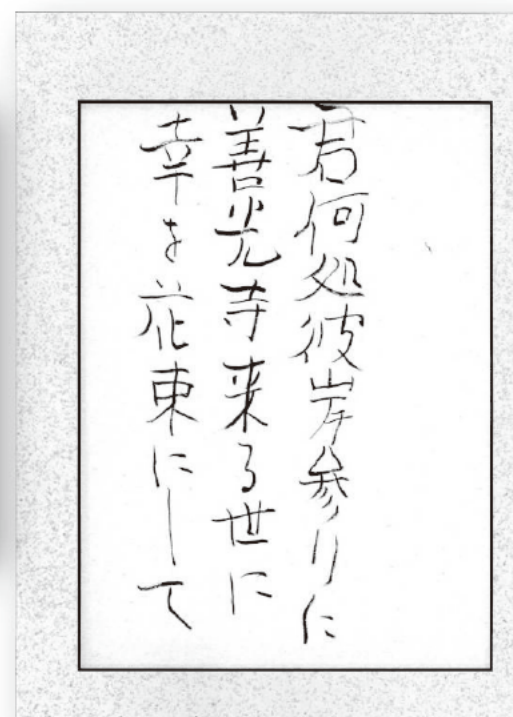
短歌 17



短歌 16



短歌 19



短歌 18

河正雄の短歌

二〇〇三年八月一日 二首

風そよぎ青柿落ちぬ^{みたま}霊呼ばん^{いくさ}戦終わ
りしかの日はてに

戦争はこりごりですと言ひ捨てる米
寿^{ひと}の男は希望なかりきと

二〇〇三年八月十三日

処暑になりて鳴き始めたる法師蟬天
候異変か雨の続きて

二〇〇三年九月三日 二首

震災のあの日思わす蟬時雨八十年目
となりたり今日は

デマ流れ虐殺されし韓^{からびと}人の幾千の魂
浮かばれぬまま

二〇〇四年五月二十九日 高根町・大柴恒雄町長を偲んで

高根町の山桜花散り急ぐ逝きたる人
を偲ぶよすがに

二〇〇五年七月四日

朝鮮の民芸を日本に知らしめし巧公
われに指針を与う

二〇〇五年七月二日

新緑を乗せて高麗川流れゆくおだし
き淵のいく曲がりして

二〇〇五年九月三日 五首

「天^{てん}の弦」を求め求めて試行錯誤の
艱難越えたり陳昌鉉は

八ヶ岳に生^あれし浅川巧公韓人に慕わ
れ忘^ま憂^う里^りに眠る

ふるさとに錦を飾りし浅川巧八ヶ岳
に抱かれ眠る

朝鮮で庶民の中で生きたりし巧の誠
心こそ歴史なり

わが生^あれし前の歴史もことごとく語
りてゆかん子孫の代へ

二〇〇六年九月五日

一夜にてぐんぐん伸びる竹の子に孫
の成長重ね見ている

二〇〇七年九月五日

王仁塚の桜散りゆき月おぼろ遠く見
ゆるは甲斐駒ヶ岳

二〇〇八年九月五日 日高市・聖天院 二首

聖天院に毎年短歌を奉納す心を込め
て一首作りぬ

韓民族無縁の霊を慰めんと歌に込め
たるわれの心は

二〇一四年 (一九六一年五月六日に会合)

ポール博士と清泉寮で出会いたり異
邦同士が孤独語りき

二〇一五年 春

言論の自由違^{たが}えておぞましき街宣ス
ピーカーのヘイトスピーチ

二〇一五年六月六日

西の方には世界への夢が広がって伯
教の里はからびとの郷

二〇一五年六月三〇日 花岡・信正寺 二首

無念なり花岡事件に死にたりし人ら
追善の経を捧げむ

こつこつと書いてゆかかんか花岡事件
歴史の真実掘り下げゆかかん

二〇一五年七月一日 呉日「きくら展」

ポプラの絵をとても好きだと八十歳
が青年のごとく目を輝かす

二〇一五年八月九日 長崎原爆七十周年の日

詫^{よう}びる要なしと論ずる知識人日韓の
未来に希望のありや

二〇一五年一月七日 山梨県清里

粉雪のように唐松舞う小春喜寿を祝
えばここ温^{ぬく}めり

二〇一六年一月三日 川口市西光寺（菩提寺）

初春に七福神の寺参り甘酒の味はみ
仏のこころ

二〇一六年五月二二日 知覧 三首

アリランの歌を残して出撃せし朝鮮
兵の家族を探す

知覧には平和を誓う鐘がなる慟哭の
誓いか特攻兵士の

惜しむごと開聞岳を三^{さんまわ}回りして沖縄
に飛び立ち行きし

二〇一六年七月 盆

かつて母が使っていたる扇風機見お
れば面影巡る盆の入り

二〇一七年三月九日 身延山奥ノ院・思親閣

ちちははと師と故郷を偲びおり身延
の山も春はまもなく

二〇一七年三月一七日 善光寺 二首

君はいま如何にいますや善光寺に参
りて幸を願う春彼岸

無縁仏となりたる君よ来世の幸を願
いて花を供える

二〇一八年七月一八日 北海道

ラベンダーの香る富良野はパラダイ
ス十勝の嶺に白雲流れ

二〇一八年八月八日 清里

南北へ夢を繋げよ虹の橋天空をまた
ぎ懸け橋となれ

二〇一八年八月一七日 清里

青春に『青丘雑記』読みふけり血を
滾らせしころを想えり

二〇一八年十二月二二日

冬至の夜あずきとかぼちや柚子湯に
もつかりて星の母を恋いおり

二〇一九年二月二五日

雪解けの野原で摘んだ露の臺お浸し
天婦羅早春の味

二〇二〇年七月二〇日 帯広競馬場

鞭打たれ砂塵舞いあげ競馬馬坂駆け
登る息荒くして

二〇二〇年七月二日 鹿追・神田日勝住居跡 二首

雪国に駒と暮らししわが青春白馬の
駆けゆくような夏雲

雪国に駒と暮らししわが青春日勝の
絵を見て思い出す

二〇二〇年七月二日 鹿追・神田日勝記念美術館 二首

日勝を偲びつつ見る大雪山日勝峠を
越えんとしつつ

日勝峠越えんとしつつ日勝の描きし
馬を空に浮かべて

二〇二〇年九月一日 利尻島

北に利尻 南に桜島ひかえ日の本^{もと}の
芯に不二の山あり

二〇二〇年九月二日 礼文島

礼文島鮑古潭^{あわびこたん}にカムイ居る筆で「漁
師日記」つづる翁は

二〇二〇年九月三日 京都東山

哲学の道に咲きいる彼岸花父母の顔
とも師の面^{おもて}とも

二〇二一年四月九日 田沢湖

田沢湖の国鱒を見き復活せよまた甦
れ「奇跡の魚」

人と人とを繋ぐ

〔河 正雄の短歌〕

沖 ななも

長い長い歴史のなかで朝鮮半島の人たちと日本人とは、深い深い関係にある。文化交流、人の交流、さまざまな場面で交流があり交わりあっていた。いまでも陶磁器や工芸品などに影響を残している。埼玉には聖天院があり、高麗王・若光の菩提寺とされている。

韓民族無縁の霊を慰めんと心を込めて一首作りぬ

朝鮮で庶民の中で生きたりし巧の誠心こそ歴史なり

朝鮮の民芸を日本に知らしめし巧公われに指針を与う

河さんはそこに行つて、誰ともわからぬ無縁になってしまった韓民族の霊を慰めるために歌を一首作っている。かつて海を渡って来た人たちに思いを込めて。

次の歌はその逆、日本人でありながら朝鮮に渡り、文化の交流をし

た浅川巧。朝鮮の陶器の美しさ、民芸のすばらしさを伝えた。朝鮮の美術品ではなく、庶民が使っていた器に美を見出した。それは国と国との公の交流ではなく、民間の交流、庶民の美の交流だったのだ。そうした浅川巧の「庶民の目」に敬意を払っているのが河さんなのである。

しかし両国には必ずしも良好な関係だったとは言えない時期がある。過酷な労働を強いられたり、差別があったり、無理解のなかで生きなければならぬ時期があった。関東大震災のときはデマの情報が飛び交い悲惨な目にあつた人たちが大勢いた。

また戦争では特攻隊として出撃もさせられて、還ることがなかった。アリランの歌を残して散つていった若い人にも家族がいたはず。残された人はどんなだったか。花岡事件も、過酷な労働を強いられて蜂起した人たちの多くが命を落とした。

震災のあの日思わす蟬時雨八十年目となりたり今日は

デマ流れ虐殺されし韓人からびとの幾千の魂浮かばれぬまま

アリランの歌を残して出撃せし朝鮮兵の家族を探す

知覧には平和を誓う鐘がなる慟哭の誓いか特攻兵士の

無念なり花岡事件に死にたりし人らに追善の経を捧げむ

こつこつと書いてゆかんか花岡事件歴史の真実掘り下げ

ゆかん

風そよぎ青柿落ちぬ^{みたま} 霊呼ばん^{いくさ} 戦^{いくさ} 終わりしかの日はて

に

言論の自由^{たが}違えておどましき街宣スピーカーのヘイトスピーチ

そうした歴史に埋もれそうな事柄をきちんと検証して纏めようとする姿勢が一貫している。現代に至ってもいまだにヘイトスピーチは絶えない。日本だけではなく世界中で差別はなくなっていない。それを世に訴える意志の強さ、目標に向かって真つ直ぐな思いが溢れているのが河さんの短歌である。

その中であって故郷や父母を詠んだ歌は温かい。

かつて母が使っていたる扇風機見おれば面影巡る盆の入り

冬至の夜あずきとかぼちや柚子湯にもつかりて星の母を

恋いおり

鞭打たれ砂塵舞いあげ競馬馬坂駆け登る息荒くして

雪国に駒と暮らししわが青春白馬の駆けゆくような夏雲

ちちははと師と故郷を偲びおり身延の山も春はまもなく

古い扇風機を見ていると父母の面影が浮かび上がってくる。父母、そして廻りの風景が目の前に浮かぶ。お盆とはそういう行事なのである。冬至には柚子湯に浸かった、カボチャも食べた。みんなみんな母の手作り。母を懐かしむ気持ちは、おそらく年と共に強くなってくるのだろう。

故郷、荒々しい競馬馬の思い出。夏雲を見ても故郷の馬が思いだされる。心が故郷へと向いていく。故郷は原点、生きていく上での大事な基盤なのである。河さんの歌は、それぞれが生きている芯のところから作られているようだ。

新緑を乗せて高麗川流れゆくおだしき淵のいく曲がりし
て

一夜にてぐんぐん伸びる竹の子に孫の成長重ね見ている

礼文島鮑古潭^{あわびこたん}にカムイ居る筆で「漁師日記」つづる翁は

こんな何気ない場面を捉えながら、人が生きていくということとは、それだけで大事なことのだと訴えているようだ。一人一人の営みが、日常の暮らしが大事なのだ。

南北へ夢を繋げよ虹の橋天空をまたぎ懸け橋となれ

わが生れし^あ前の歴史もことごとく語りてゆかん子孫の代

へ

河さんの願いはここに至る。南北とは北朝鮮と韓国のことかもしれないが、そればかりではなく、人類が何かと何かを繋ぐ架け橋であってほしい。けっして断絶であってはならない。そうした願いが込められているように思う。

今までにおこった自分の知っている歴史上の出来事を子孫に語っておきたい。自分が経験したことだけではなく、もつともつと以前の、自分が生まれる前、古代から続いている関係を繋いでおきたい。繋ぐ、今と昔を繋ぐ、国と国とを繋ぐ、人と人とを繋ぐ。

河さんの作品は、そうした願いの込められたものだと思う。

筆者略歴

沖 ななも（おき・ななも）

一九四五（昭和二〇）年、茨城県古河市生まれ。七四年、「個性」入会、加藤克巳に師事。佐藤信弘と「詞法」創刊。「個性」終刊により「熾」を創刊、代表となる。現代歌人協会常任理事、埼玉県歌人协会会长、朝日新聞埼玉版、埼玉新聞、茨城新聞短歌欄選者。「埼玉文芸賞」「埼玉文学賞」選考委員。第一歌集『衣裳哲学』で第二十七回現代歌人協会賞受賞。「埼玉文芸賞」「埼玉県歌人協会賞」「茨城県歌人協会賞」「埼玉文化賞」など受賞。歌集に『機知の足首』『一粒』『ふたりごころ』『三つ栗』『白湯』『日和』など。エッセイ集『樹木巡礼』『神の木民の木』『季節の楽章』など。評論集『全円の歌人 大西民子論』など刊行。

書道遍歴

— 峡山 植松永雄の自伝 —

私の書道遍歴

峡山 植松 永雄



家族（昭和35年4月）

「秋ばれ山ごえ」。小学校三年時の課題が見事金賞に選ばれ、担任の大久保今朝代先生に肩をおされて自分の作品の前に立ったのが今日の始まりである。四年時の課題は「公明正大」だった。昨年の褒美にと父が百二十四の筆を買い与えてくれた。それは子供心にも他の友達とひととき違った筆に見えた。立派な筆を持った私が当然金賞に輝くと思っ

いたが、期待は見事にはずれ、その年は賞なしであった。父がその時、油断大敵と言ったか、弘法筆を選ばずと言ったかは覚えていないがかなり落胆していたのではないかと今思い出す。父がはずんだ百二十四の筆代は当時としては大金であったはずだ。一九四九年（昭和二十四年）は戦後もまだ貧しい時代で、清書用紙ですらそうふんだんには使えず、新聞紙が真黒になるまで練習したものであった。磨墨の時、墨が斜めになれば心がまがっているからだとか、墨がにじんでも、かすれてもすべて心に結びつけて小言を言われたものだ。万事がそんなことであつたから姿勢なども厳しく躰けられたものだ。父は自分では書けなかったけれど口うるさく熱心に教えてくれた。

この年は書道会で言えば大方の書道人の実力者は「文検」合格者であつたが、文検制度（昭和一九年から二二年は実施せず）は廃止となり、以後は新制大学の免許法に変わった年でもあつた。又大学時代の師となる石橋犀水先生が「日本書道教育学会」を創立され、その学会誌「不二」のお手伝いをしようとは夢だにも思わなかった。

五年時の課題は忘れてしまったが、その年も成績はよくなかった。ライバルの友達には、原君、岩間君、坂本君などがいた。今の親はどうかしらないが、昔はよく他の人と比較をし〇〇君を見ろ！と発破を掛けられたものだった。岩間君をよく引き合いに出されたので今でもライバルの延長線上にいるものだと思っている。でもここまでくるとどちらが長生きするかぐらいで、特別何がどうと言う気にはない。二年連続の苦杯の後、六年時の課題は「新

しい第一歩」であつたが、再び金賞に輝いた時にはさすがにうれしかった。親がその時どんな風に喜んでかはもう問題ではなかった。

中学校も三年間習字を続けた。田舎の農家の長男だったのでどの家庭の子供も同じであつたが田畑の仕事は手伝われた。家畜の世話も同様であつた。中学校三年の時は甲府の山梨大学で席書き大会があつた。参加者を集め、司会進行から挨拶まで、すべて学生が行っていたのには驚いた。さすが大学生だと思つた。課題はもう忘れてしまつたが、その時の知事賞は同級生の氏原紀久枝さんだった。私は二番手か三番手の推薦賞であつた。欲しかった賞だけにショックは大きかった。小学校三年の金賞から中学校三年時の最高賞と有終の美を飾りたかつたのだが、夢は破れたのであつた。過日同級会の席上、彼女にその心を打ちあげたのだったが、彼女はいともあっさり「私はそんなことを意識はしていなかった。淡々とした気持ちであつた」ともらしていたが、十五歳の少女が早くも無心の境地でいたとは何とも恐ろしいことであつた。私はこの時以来、賞とか競書誌の書道と無縁になつたように思う。

小学校一年から中学校一年まですべて女性の担任であつた。中学校一年の担任が女性とわかった父は校長室まで直談判に来たようだ。私は何とも恥ずかしい思いをした。そのことがあつてかどうかは知らないが二、三年時は男の先生であつた。数学が担当の大久保勝雄先生は書道を熱心に教えてくれた。私は数学は苦手だったが書道が得意だったので先生との関係は良好であつた。三年時の秋口から持病

の眼病を患い三ヶ月ほど学校を休むことになり、高校入試は大いに心配であったが、それより卒業の方



峡北高校書道部（前列左から2人目）

が問題で学年主任の宮沢先生が来宅され、「永雄は皆と一緒に卒業したいか」と問われた時には、当の本人より親の方が青くなつたようである。そんなことで心配であつた高校入試もなんとかパスし、峡北高校に入学することが出来た。その頃の進学率は五〇パーセントそこそこであつたようだ。持病の眼病が高校生活に耐えられるかどうかの判断をしてもうため。東京の日本医科大学の眼科に診察していただき、許可が出たのは入学式から一週間後であつた。

一九五六年（昭和三十一年）の高校入学の年、書道の授業は高等学校学習指導要領で「芸術科書道」と

なり、芸術教科は選択科目となり私は「書道」を選択した。上田桑鳩氏や宇野雪村氏が日展を相ついで脱退し、書道会も伝統派と前衛派の対立に一つの決着がついた時でもあつたが、田舎の高校生がそんな流れを知るよしもなかった。

通学は往復徒歩であつた。片道一時間半はかつた。一日三時間歩くことは何となくもつたいたいような気がして、八百円の中古の自転車を買ったが父は靴二足を買い与えるからと歩くことを命じた。このことは後の勤務に大きな自信となつた。三十七年間、風邪で一日、二日酔いで一日（これは登校欠勤とも言えようか、学校には居たものの授業を成立させることが出来なかった。）この一日は校長の計らいで欠勤にはならなかったようだが、本人にとっては胸の痛む一日であつた。四十歳の時、オタフク風邪で二週間の出校停止を受け、明けて戻つてきた時、入学式のたつた一回会つただけの生徒二人が休んでいた。教卓の一番前にいたO君とSさんであつた。大方の生徒を忘れていくなかで、この二人は今だに顔型を覚えている。

さて話は前後したが、高校の授業は時間講師の原田耕村先生であつた。温厚な先生は怒れば恐いとの評判であつた。大久保先生も尊敬していた先生だったので安心して教わることが出来たのだが、書風が合わなかつたのでそれ以上には進まなかつた。先生の偉大さがわかつたのも私が教師になつて甲府西高校に勤務する四十歳の頃であつた。

私が何故書道部に入部したかは私の積極的な意志ではなかつた。二人の先輩の女性が何回か勧誘してきたからかもしれない。三年の部長さんに惹かれた

のかもしれない。顧問は農業科の清水先生であつた。篤実な先生で専門的な指導が出来ないからと言つて別な意味で色々お世話をいただき感謝をしている。卒業アルバムを見ると男性二人と女性十数人という大部隊である。男性の渡辺君とは今でも少し親交があるが、書道の話をしたことはない。

私が書を兼ねて二松学舎で勉強しようと決心したのは、夏休みの特別課外講座であつた。当時田舎の高校でよくあんな立派な先生を呼んだものだとか教師になつてわかつたのだが、数学は苦手であつたが熱心で熱弁をふるつて教えてくれた三井先生の姿は今でも声と共に思い出す。ある時、問題の開法途中ハタと黒板の手を休めてしまひ何度か考え込んでしまった。そこへ問題のプリントを起こした先生がその旨を伝えるに飛んで来たのである。先生は俄かに顔をほころばせ、解けなかつた理由を得意然として説明するのであつた。「さすが」と私は思った。



学生寮で書道の練習をする植松永雄

先生に対する尊敬と信頼が増したことは当然であった。少々前置が長くなったが、数学の三井先生の話が主役ではない。関良一先生の現代国語のことである。

当時近代文学の権威者と言えば塩田良平と吉田精一であったかと思う。東京教育大の吉田先生の門下で次の近代文学研究の雄であった。先生の授業は現代文の長文をいともコンパクトに設問と解答のからくりを理路整然と示してくれたことである。国語の魅力をこんな形で示してくれた先生は初めてであった。二松学舎へ行こうと密かに決めた私は二学期も始まって間もない日に進路指導室の吉沢先生に相談をした。先生は私が書道も一所懸命しているのを知っていて「君、二松学舎では書道も勉強できるから関先生を慕い二松に行くならもってこいだよ」と諸手を挙げて賛成してくれた。自分の将来が半分見えたものの父親を説得するのが大変であった。父は県庁の職員にならせたかったようだ。母は兄さんが電電公社の本社の人事課にいたので、公社の受験を希望した。三人の思惑が複雑に絡み合うなかで、最後は恩師大久保先生の助言で私の二松学舎行きは決まったのであった。父は学資のことで心は最後まで揺れていたようである。高校も卒業間近私の二松行きを知った島口三郎先生は「二松学舎では漢文をしっかり勉強するように」と一夜励ましに来てくれた。北大出身の化学の先生であった。先生には化学を教わったが、出来が悪かったので先生に励まされた時は気恥ずかしかったが、化学の先生が何故二松の漢文を知っていたのか不思議であった。又近所の寺の草間さんが二松学舎の先輩にあたる

ことを父がどこからか聞いて来て私もびつくりしたが、同級生の久枝さんのお父さんであった。在学中一度も二松学舎の報告をしなかったことは今思い出ししても迂闊なことであった。昭和三十四年四月、私は恩師大久保勝雄先生の物心両面にわたる支援のおかげでようやく東京の遊学が実現したのであった。



作品の試筆をしている石橋康水先生

一九五九年、昭和三十四年四月一〇日は今上天皇が正田美智子さまとのご成婚の日でもあった。また、武川、白州は富士川を北上してきた伊勢湾台風の大災害の夏でもあった。あれから今年には五十年である。このことの光と影は歴史の流れのなかで静かに受け入れることとしても、父は三十六年前に亡くなり、恩師大久保先生もこの春逝かれた。誠に残念なことである。昭和三十四年三月、高校卒業の記念にと大久保先生のお宅で書した李白の子夜呉歌、大学入学の

十月、絶句杜甫、奇しくも今年五十年である。このたびの「峡山・植松永雄書五十年展」はこの二点を基軸に展開されることになる。一九五九年、昭和三十四年の三月と四月は、高校卒業と大学入学というあわただしい時期でもあり大きな転機の年でもあった。一月には「全日本書写書道教育研究会」が発足、以後全国の書写・書道教育にかかわる小・中・高の教師の研究母体となり、現場の実践報告がなされていくのである。また前年ワシントンで個展を開催した前衛美術家篠田桃紅が銀座松坂屋で帰朝第一回展を。比田井天来記念前衛展（銀座村松画廊）・比田井南谷墨象近作展・日本美術の伝統と革新四人展（オランダ）に篠田桃紅・比田井南谷出品・サンパウロビエンナーレ展に比田井南谷・森田子龍招待出品等々、書の革新や前衛作家の海外進出が目だった年でもあった。

日本の書壇が目まぐるしく国内外で動いている東京にいてその動きの目がどこにあるのかも知らず、千代田区三番町の二松学舎は都心とはいえず静かなたたずまいであった。父をして「東京にもまだこんな大学があるのか」と言わしめた学舎は本造二階建の古びた校舎であった。金子清超、本名哲太郎先生は二松学舎出身の老先生であった。先生は一年間欧陽詢の九成宮醴泉銘の練習に明け暮れたのには驚かされた。何のおもしろ味もなく、ただただ九成宮だった。大学の先生だからもつとすばらしい授業を展開するのかと思っていたが旧態依然としたものだった。皆はどう思っていたかはしれないが私は不満であった。そんな時出身を聞かれ「山梨」と答えると、山梨には二松学舎でも学んだ篆刻家の内藤



峡北高校書道部

香石がいるので、雅印を依頼する時は話をしてあげるとのやさしい言葉であった。山梨にもそんな偉い先生がいるのかと認識をあらたにした。まだ入学間もなくで雅号のことも雅印のことも頭になく、ひたすら、半紙に九成宮の臨書であった。先生は肉筆手本は示さなかったが添削は熱心してくれた。大学一年の学園祭の作品は杜甫の絶句で、永雄書に雅印は先生所有か、部の印を借りて押したものであった。銀座の画廊やデパートでは、松坂屋や三越では展覧会をしていたるうに。また秋の日展は上野公園の都美術館で開催していたのに。銀座も上野も行動範囲に入らずただひたすらの通学路であった。上野は乗りかえ駅にもかかわらず、美術館も博物館も見学しずまいの四年間であった。銀座などは学生には無縁の街だと思っていた。大学四年間、私は銀座には行ったことはなかった。郷里への始発駅にもかかわら

ず、新宿の街にも降りたことはなかった。喫茶店もひとりでは入ったことはなかった。ましてや彼女とコーヒーを飲むなどということもなかった。ただ一回、神田の駅前のコカジ（小鹿路？）に入ったことはあるが、遠い思い出になってしまった。たしかコーヒー一杯が六十〜七十円の頃であった。松戸にあった柳仙育英センターという学生寮で、そこからひたすら三番町にかよった。三番町は静かであり通りであった。都電の九番線と十一番線が三宅坂の方に走っていたように思う。

九段坂から神田神保町に向かい水道橋か、お茶の水に抜ける通りが神田の古本屋街である。そして一週間に三日は古本屋まわりをした。買う買わないは別として、本の背表紙を見るだけでも楽しかった。廻り廻って神保町も親しみのある街になった。古本屋の書棚が私の書斎になったような満足感を味わうようにもなった。本を採す学友に書店名を指示出来ることは愉快なことであった。

九段坂を神保町に向かって下りていくと、右側に玉川堂という筆墨硯の老舗があった。手頃な硯が欲しく、都度つど寄らせてもらった。あまり足繁く通うものだから、女将さんから声をかけられるようになった。二松学舎の学生さんで山梨なら、貴方、雨畑硯があるでしょう。帰省してお父さんに買ってもらいなさい。」との助言であった。たしか商品棚には雨畑硯もあったが、私のお目あては千五百円の若田石であった。長方形の品のよい硯であった。当時八千円の生活費のなかで千五百円の硯を買うことは大変なことで三回の分割払いで買ったかったのだが、そのことを切り出すのに三ヶ月もかかって



「明歴露堂」の扇子（竹扇作家、金大銘・全羅南道文化財 48 の 1 号）

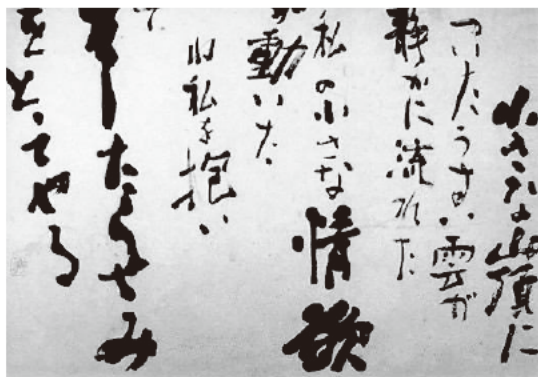
しまった。帰省しても雨畑硯は高価で買えないことや、帰省中に家で使いたいこと、一度に支払いが出来ないこと等こちらの勝手な条件だけを伝えるのがやつとであった。玉川堂の女将はきれいな方で、店に寄るのが楽しみであった。学生さんはまだ「石の肌」などと言ってもわからないかも知れないと言って、二、三の石を手許に置き、硯の肌触りを教えてくれた。勿論硯は帰省の時家に持ち帰ることも出来たし、ありがたいことに三回の分割で、しかも二松学舎の学生ということだけで、学生証の提示も求められずに品物を渡してくれた女将には感謝の限りである。いい時代と言えはそれまでだが老舗の品格というものだろうか。あれから四十五年後、対馬を旅した時、若田石が対馬の産であることを知り大いに感動した。我が青春の若田石であった。

一九六〇年（昭和三五年）、六〇年安保といえど全学連、全学連と言えど安保と、この年は安保、安保で明け暮れた。「安保反対、岸を倒せ」デモ隊の合言葉であった。田舎の父はテレビを覗いて「お前もあの目刺しの行進をしているのではないだろうな」と手紙で心配してきたものだ。父の手紙はあとさきこれ一通だけだった。当時あの世相で学生たるものデモの一回や二回参加しないのは学生ではないと言われた。

三番町通りは毎日学生の波であった。お茶の水から神保町、九段下から靖国神社を三番町通りに、大学は、明治・日大・専修・法政・中央・共立・大妻・東洋・東京家政等々大学はあるにしても、どこから学生が湧き出してくるのか不思議であった。我が学舎の二階の窓からうらやましく学生の行列を眺めたものである。六月一五日夜、樺美智子さんの事件を境に、我が二松学舎もおくればせながらもしばらく重い腰を上げたのであった。学生総数三百足らずの自治会の先頭に、立ったのは、山形出身の中鉢先輩であった。学生課と折衝した結果、日の丸の旗を持つていく条件で許可が出た。自治会旗と日章旗の組み合わせに三十人そこそこの貧弱な集団は、いかにもデモ隊の隊列には似合わなかった。

大学二年時には新潟大学を退官間近と聞く石橋犀水先生が我々を受け持つことになった。書道理論で博士号を持つ先生の「書道概論」を教科書に、実技と理論の並習であった。九成宮一本槍から古典臨書も同時並習で机の上は俄かに広がりを見せ、書に対する考えも多様性を持つようになった。先生はよく示範をしてみせてくれた。半紙四文字か六文字で

あったが、文字は小さく書いてあるのに大きく見えて不思議であった。二つの古典を同時に書き分けて



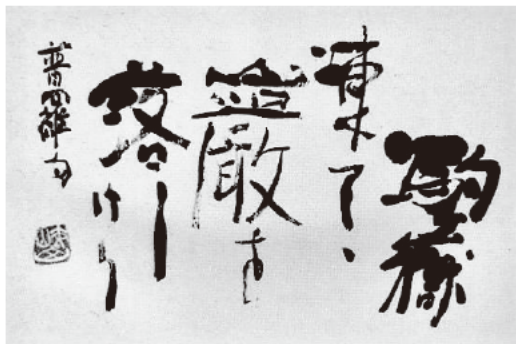
富吉の詩（1962年）

も見せてくれた。この方法は後の私の授業に生かすことが出来ている。普段は黙って書くのみで添削はほとんどなく、机間巡視をしても指摘はなかった。何か言葉をかけてほしいくらいだったが、寡黙な先生であった。この態度なども後の私の部活動や授業に生きているように思う。先生も二松に来て私たちが最初の生徒であったので力を入れてくれたし、頼りにもされた。部活も指示されたがなかなか形にならなかった。秋の学会展に出品するよう助言をいただいてその準備にも入ったのだが、この時雅号のことで悩むことになる。先生の一字をいただいているのか、それとも自分で考えるのか、鹿児島島の岡元君と二人で、ああでもない、こうでもないとい色いろ

迷った。

岡元君は父親が春山の号を持つており、自分もその春をもらい春峰と命名するという。鹿児島島の城山公園かどこから見える山らしい。彼はすんなりきめたので、大方腹の中では春峰と決めてあったのだろう。くらべてこちらは何の素養もないので、決めるのに苦労した。彼が故郷の山に由ったので、私もふるさとの山やまを巡らしてみた。甲斐駒ヶ岳は地元では白駒というので白峰はどうか、白山はどうか、そこから流れ出る尾白川や金無川の水はどうか、そうすれば犀水の水にあやかり白水はどうか。金川はどうかと本当に困ってしまった。彼より良い名をと思うとなおさらうまくいかなかった。石橋先生に号の由来などを聞いてもみた。先生は九州は福岡県の出身で、地元を流れる犀川の犀水だという。後でわかったことだが先生に教えを受けた人に犀水の犀の字をもらった人がいないということである。してみれば号は皆自分で考えたのかもしれない。命名料をとられてはとか金の心配をしていた二人がおかしくもなかった。それから程なく、私は母校峡北高校と峡北地方の山々（甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳、茅ヶ岳、金峰山、鳳凰三山）から峡山を名乗ることにした。まあ取りあえずの間に合わせぐらいに思っていたが、どうしてどうして五十年間峡山と付き合ってきた。付き合ってみればなかなかいい名前前で愛着すら湧いてくるものだ。八ヶ岳や甲斐駒の俳句をよく書くのも峡山の誼みかもしれない。それでも途中峡山をやめて永雄でいいこうかと思つた時もあった。作風によつては峡山ではそぐわない事態が出てきたのである。話が少し前に行つてしまつたが、その夏休

み内藤香石先生を訪ね、雅印をお願いすることにした。日下部駅で降り亀甲橋をわたり、八幡神社の前まで来た時、先生と路上でバッタリ、「今、君これから東京の印章組合の講習に出かけるから」ということで、そのまま先生と日下部駅にもどった大学二年の夏であった。路上「峡山」一顧をお願いし、後はそれにあわせての三顧組になることをお伝えした。大学の金子先生の紹介や叔父・森知仙の知己も



前田普羅の句「駒ヶ嶽凍てて嶽を落としけり」

得ていたので二千円の刻料であったかと思う。さすがに分割とは言えなかったが、分刻であったので結果的には分割と同じであった。

書道の練習も日に日に熱が入り、学生寮の大広間は私の練習場にもなったが、この広間は仲間全体のものでもあった。相撲を取りたい仲間、談笑をした

は千差万別であった。そんなことでその年の暮、世田谷は小田急線の豪徳寺の駅近くに下宿することになった。山本さんというお宅であった。仲間は北海道の宮本君、青森の内藤兄弟、福岡のS君（山本さんの縁者名前を失念）、山梨の小沢正君、そして自家の義隆君であった。

縁はいなものというが、山梨の小沢正君（市川三郷町の高田出身）である。彼は後の指揮者、小沢征爾さんとは従兄弟で、彼の部屋はレコードで埋まっていた。当時小沢征爾さんは世界に向かってスクーターで音楽の武者修行に出かけていて、若者のアイドルであった。そんなことで私は小沢征爾さんのご両親様にも東京駅でお目にかかっている。小沢正君の尻馬に乗ってのことである。「征爾はピアノを弾きっぱなし弾いて十一時間目に倒れた。」とお母さんから聞いたときは流石だなと思った。私が同じ体験を実行したのはそれから四年後の夏であった。書きっぱなし十二時間の目標を立てたのである。先ず一時間もするとお尻が痛くなり、二時間位で背中が痛くなり、三時間から五時間の間は背中からお尻がどちらかわからなく、五時間過ぎると痛さは麻痺してしばらくは鎮まった様に思った。それから背中、尻、腕、指、首、肩と痛くなるところはすべて痛くなった。最後は指を筆から離すというか筆を指から離すのが苦労であった。この体験は後にも先にもこれ一回きりであった。ここでは長くすることと忍耐することの意味や体力、気力、精神力との関係を知ることが出来たように思う。時に二十五歳の夏、八月一日のことである。

下宿ではたまの日曜日に小沢君のレコードを聴



風林火山（1990年）

くことが楽しみであった。田舎出の高校生がレコードを聴くなどという習慣はなかったし、ましてやクラシックを聴くなど、どこかのお嬢さんのやることだと思っていた。男がレコードを聴くなど女の子いことだと思っていた。最初は恥ずかしそうに聴いていたが、聴きなれてくると快い音が体の中に行きわたり、何となくうつとりしたり心が静まるような気がした。そのうち彼はベートーヴェンの第五「運命」を聴かせるようになった。指揮者によって「運命」の出だしはこのように違うというような説明を加えるようになった。フルトヴェングラー、ワルター、トスカニーニ等々、その時に覚えた名前である。

一番の勉強は同じ楽譜の記号から音色の違った音が出てくる不思議であった。指揮者の解釈によつての不思議である。このことは後の書に大きなヒントをくれたように思う。演奏の一回性と書線の一回性は非常によく似かよつていて、しかも時間の流れのなかで一作一作の変化はあのレコードコンサートで学んだ「第五」のおかげだと思つてゐる。今度の作品集もそうだが、展示する作品の中で同一作品の違いを何通りか展示するのもその影響である。そして書くとき平面構成でなく時間の流れ、呼吸を大事にするのも、音楽の時間性からヒントを得ている。ピアニスト・安川加寿子氏の「ピアノは背中で弾くものだ」はあの十二時間の練習のなかではじめて理解できたし、フルトヴェングラーの「音と言葉」のなかの「すべて偉大なるものは単純である」は今もつて忘れられない。言葉である書がまた単純明快なものであるからであった。

大学三年の夏、犀水先生の推めで新潟大学書道科の赤倉の合宿に参加した。中央線を信越線に乗りかえ、赤倉温泉の会場に着いたのは夕方のことであった。書道科の生徒の練習量の多さと書く時の速さには驚かされた。私の練習量の二倍、三倍である。筆にしろ硯にしろ私の持物とは格段の相違で、苦心し手に入れた若田石もみずばらしく見え残念であった。道具と技術の向上は比例しながら上昇することがわかった。私は出来るだけ多くの友人の書き方を見学し、情報を収集することに努めた。書くことより見ることに重点を置いた。用意していった一反の全紙を大事にしなが、あまり気づかれないように練習をした。他人の飯を食うというはじめての体

験を終え、帰途柏原の一茶の里を見学した。「痩せ蛙まけるな一茶これにあり」はこの時覚えた句である。こうして四泊五日の一人旅を終えた。スクーターでの世界一周の音楽武者修行と比べればささやかな旅であったが、私にとっては意味ある旅であった。大学四年になると俄かに卒論の話になった。マイスターを誰にするか、テーマは何なのか決めるとなるとなかなか決められなかった。雅号の時もそうだが、決めるといふことは選択をすることで、人生は



「風林火山展」での揮毫（2007年）

いつも大なり小なり選択の連続のような気がした。そうして自分で決断するたびに人は成長するのだろう。

結局、横光利一の作家論に決めた。テーマは遠大であった。文字学の加藤常賢先生は、学問は小さな穴から覗けと教えられたが私は大きな風呂敷を拡

げてしまった。「新感覚派、横光利一批評と文学史の方法について」であった。その頃、ハーバード・リードの「ニューヨークリズム」が新しい批評の方法として注目をあびていた。作家の生活環境とか生いたちの評伝ではなく、純粹に作品の中を鑑賞し批評するというものであった。ともあれ百五十枚程度の草稿を仕上げ卒論の形はととのつた。一方書道の方の卒業制作は後輩の庭野富吉君の「小さな山頂についた」で始まる「情婦」という現代詩であった。漢詩文の条幅にしかなかったのは漢籍や漢詩文の素養と学力の問題であった。今回の五十年展の基本的な三点のうちの一点となつてゐるものである。四十五年間その現物を保管してくれた増田幸彦君には感謝するのみである。短い四年間の学業ではあったが精一杯の結果を残し、私の東京生活は終わった。石橋先生の「東京に残ったら」のご助言を辞退申し上げ、帰郷した。犀水先生の文鳳閣に学恩のお礼におうかがいした時、水盂を受け、その意味も知らず奥様が水と酒をまちがえたと思つた程度で先生のお宅を辞した。後で水盂の意味を知った時は思わず涙が出た。先生が如何にお力をお貸し下さったかを思い知り、その後の書業のバネにしている。先生の「学・芸・道」の意味が今少し解りかけてきたところである。

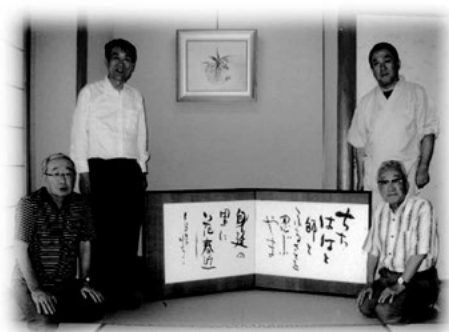
（二〇〇九年一月）

峡山 植松永雄 年譜

- | | | | |
|---------------|--|---------------|---|
| 1940 年 | 北杜市白州町白須生まれ | 2004 年 (64 歳) | ヨーロッパ歴訪 (スイス・チューリッヒ、アルプス) |
| 1959 年 | 山梨県立峡北高校卒業 (現北杜高校) | 2004 年 (64 歳) | NHKBS テレビ「おい日本・わたしのすきな山梨県」出演、風林火山揮毫／第 5 回個展 (甲府・桔梗屋花葉亭画廊) |
| 1963 年 | 二松学舎大学文学部卒業 | 2005 年 (65 歳) | アフリカ歴訪 (エジプト・カイロ) |
| 1964 年～2001 年 | 県立高校書道教諭 (身延高、峡北高、甲府西高、盲学校、中央高) | 2006 年 (66 歳) | ヨーロッパ歴訪 (ギリシャ・アテネ、デルフィー) |
| 1968 年 (28 歳) | 第 1 回個展 (甲府・オリエンタルホテル画廊) | 2007 年 (67 歳) | 第 6 回個展・「風林火山」展 (市川三郷町大門碑林公園)／白州六人展 (白州町金精軒ギャラリー) |
| 1972 年 (32 歳) | 植松峡山・小笠原環山現代書二人展 (甲府県民会館) | 2010 年 (70 歳) | 峡山 植松永雄書 50 年展 (山梨県立美術館) |
| 1972 年～1974 年 | 現代書百選出品 (東京・上野都美術館) | 2012 年 (72 歳) | 韓国・霊岩郡立河正雄美術館作品収蔵 |
| 1976 年 (36 歳) | イタリアミラノ展出品 (ミラノ中央市民文化センター作品所蔵)／信玄公祭り 「山日」紙上に約 10 年題字揮毫 | 2016 年 (76 歳) | 光州市立美術館、霊岩郡立河正雄美術館訪問 |
| 1978 年 (38 歳) | 中国歴訪 (広州、桂林、韶山、長沙) | 2018 年 (78 歳) | 光州市立美術館分館河正雄美術館・李禹煥展開幕式参席／身延山松井坊作品収蔵／秋田県仙北市立角館町平福記念美術館作品収蔵／書・陶二人展 (ノリタケの森ギャラリー) |
| 1983 年 (43 歳) | 第 2 回個展・教壇 20 周年記念展 (甲府・県民会館地下画廊) | 2019 年 (79 歳) | 浅川巧墓参 (ソウル・忘憂里墓地) |
| 1985 年 (45 歳) | 第 3 回個展・蛇笏生誕 100 周年記念展 (甲府・甲府西高校) | 2021 年 (81 歳) | 浅川伯教・巧兄弟顕彰碑揮毫／わらび座作品収蔵／田沢湖畔故郷の碑揮毫 |
| 1988 年 (48 歳) | 中国歴訪 (北京、上海、西安、成都) | | |
| 1993 年 (53 歳) | 第 4 回個展・教壇 30 周年記念展 (甲府・県民会館地下画廊) | | |
| 1994 年 (54 歳) | 中国歴訪 (北京、上海、西安、成都) | | |
| 1995 年 (55 歳) | ヨーロッパ歴訪 (ベルリン、パリ、ロンドン) | | |
| 1995 年 (55 歳) | 白州三人展 (白州町金精軒ギャラリー) | | |
| 1998 年 (58 歳) | 植松峡山・平岡陶進二人展 (甲府・県立美術館) | | |
| 2000 年 (60 歳) | 中国歴訪 (上海、西安、敦煌、ウルムチ、トルファン) | | |
| 2003 年 (63 歳) | ヨーロッパ歴訪 (イタリア・ローマ、ナポリ、ボンペイ) | | |
| 2004 年 (64 歳) | 台湾歴訪 (台北、故宫博物院) | | |



田沢湖畔に建立した「ふるさとの碑・平和の群像」。植松永雄（右）と河正雄夫妻 =2021年10月28日



松井坊への寄贈作。植松（右端前）と河（右から3人目）



わらび座に寄贈



北杜市に建立した
浅川兄弟顕彰碑の
「露堂堂」=2021
年6月13日



顕彰碑 東喬 金熙秀先生

河正雄コレクションとは

河正雄コレクションは、在日韓国人2世で実業家の河正雄が約五十五年かけて収集した一万二千余点の美術作品群。河正雄はメセナ（文化・芸術の支援）精神と「分かちあう心の美学」を実践している先駆者です。

河正雄は二〇世紀に韓国と日本の不幸な歴史の中で亡くなられた犠牲者・無縁の霊を慰めるために、秋田県の田沢湖畔に「祈りの



河正雄

美術館」を建立しようと、在日作家の美術作品を中心にコレクションを始めました。

そのコンセプトが「祈り」です。それは平和への祈りであり、愛と慈悲にあふれた祈り、犠牲となった人々や虐げられた人々、社会的な弱者、歴史の中で名もなく受難を受けた人々に向けられた人間の痛みへの祈りの心が込められています。「二つの祖国」の中で、在日として生きた河正雄の心の在り方を表現したのが河正雄コレクションです。

田沢湖畔に「祈りの美術館」を建立する計画は日韓の歴史認識問題などで実現しませんでした。しかし河正雄はその後、収集したすべての美術作品を韓国・光州市立美術館をはじめ、霊岩郡立河正雄美術館や秋田県仙北市立角館町平福記念美術館、埼玉県立近代美術館など、韓国と日本の公的な美術館等に寄贈しています。美術を通して、韓国と日本を結ぶ懸け橋の役割を果たしている歴史的にも貴重なコレクションです。

河正雄コレクションについて、美術評論家の千葉成夫は、「『祈り』を中心に据えた、表現としてのコレクション。世界を見渡しても、そう他には類例はない」と評しています。

この資料集に収録した植松永雄の書も、河正雄コレクションの一つです。

東江 河正雄（ハ・ジョンウン）

一九三九年生まれ（晋陽河氏）。一九五九年秋田県立秋田工業高校卒。一九七二年株式会社かわもと（不動産賃貸業）創立。韓国光州盲人福祉協会（一九八一年）と同会館（一九八九年）設立。二〇〇一年終身光州市立美術館名誉館長就任。二〇〇三年韓国朝鮮大学校美術学名誉博士号授受。二〇〇七年韓国朝鮮大学校デザイン大学院客員教授就任。光州広域市・釜山広域市・ソウル市名誉市民、全羅北道名誉道民、山梨県北杜市名誉市民。韓国の文化芸術発展に寄与した功により、二〇一二年に在日韓国人で初の宝冠文化勲章を受勲した。著書に『全和風―祈りの美術』『望郷―二つの祖国』『恨』、『95』『韓国と日本、二つの祖国を生きた』『二つの祖国』『祈りの美術』『念願の美術』『尋剣堂』など。

河正雄アーカイブ <https://www.ha-jw.com/>

- 32・54 吾子洗い絆深める湯船かな
- 33・55 短くも今年も鳴きしカナカナと
- 34・56 春至り王仁廟に開く枝垂桜
- 35・57 老い迫り花咲き実なるいつのこと
- 36・58 燃え燃えて義士の華出づ桜島
- 37 パステルで清里の風花に描く
- 38・59 彼岸にて酒酔む君かひばり鳴く
- 39 ひまわりが退く君に垂れている
- 40・60 片貝の浜で会いたいかもめたち
- 41 ラベンダーに面影重ね偲ぶひと
- 42 富良野里花とりどりのごちそうよ
- 43 印象派富良野花園で名画描く
- 44 天国は富良野にありし花波丘
- 45 春競う咲きそろいたる梅と桃
- 46 山桜夕日に映えて舞い散れり
- 47 雷鳥が嵐を呼んで大暴れ
- 48 かもめ群れにしんが来たと古舟湧く
- 49 虹くぐる奥羽本線ゴトゴトと
- 50 軒々の柿熟したるしぐれかな
- 51 梅まつり母も参りし成田山

■短歌

- 1 新緑を乗せて高麗川流れ行きおだしき淵に
魚の影見ず
- 2 一夜にてぐんぐん伸びる竹の子に孫の成長
重ねているも

- 3 王仁塚の散り行く桜に憂いありおぼろ月夜
の甲斐駒の峯
- 4 聖天院に毎年短歌で慰霊する心を込めて一
首作れり
- 5 ポール博士清泉寮で出会いたり異邦の二人
孤独を語る
- 6 言論の自由違えておぞましきヘイトスピー
チの街宣スピーカー
- 7 西の方に世界夢見て八ヶ岳望む伯教の里か
らびとの郷
- 8 無念なや花岡事件に死に行きし歴史鏡に追
善の経
- 9 こつこつと書いて行こうよ歴史の真実こつ
こつ歩み掘り下げ学ぶ
- 10 ポプラの絵とても好きだと八十歳が青年
の如く輝きて言う
- 11 詫びるなとテレビで論ずる知識人未来の日
韓に桃源ありや
- 12 さらさらと唐松が散る小春日に初雪の様
に喜寿を祝う
- 13 初春に七福神の寺参り甘酒の味御仏の心
- 14 知覧よりアリランの歌残し飛ぶ朝鮮兵の
縁故を捜す
- 15 五月晴れ平和を誓う鐘が鳴る慟哭の誓知
覧の空に
- 16 沖縄へ開聞岳を三回りし飛び行く岬に彼
岸花咲く
- 17 盆の入り母が使いし扇風機走馬の如く巡
る面影
- 18 君何処彼岸参りに善光寺来る世に幸を花
束にして
- 19 最北の鮑古丹にカムイ居る九十瀬番屋守
の歴史ある

図版データ

■書

- 1 吾 78・5×115・0cm (1971年)
- 2 女子 60・5×66・5cm (1990年)
- 3 女子 79・0×59・0cm (1990年)
- 4 吾 78・5×110・5cm (1994年)
- 5 母 118・0×59・5cm (1998年)
- 6 岳 135・0×80・0cm (2007年)
- 7 月出山 (2021年)
- 8 俳句「ふるさとを田沢と呼ばん彼岸花」
- 9 短歌「ちちははと師とふるさとを偲ぶやま
身延の里に花春近し」
- 10 崔子玉座右銘 (2018年)

■俳句

- 1 春霞み丸い地球の屏風浦
- 2 潮引ける外川の磯の北寄採り
- 3 恋夢二宵待草の君ヶ浜
- 4 外川港極相林に椿咲く
- 5 日の出つる岬の春はハワイより
- 6 犬吠の牧水碑詠む春波濤
- 7 春うらら清明空はこぼし色
- 8 春雨に萬の花綻びる

- 9・52 高原の風パステルに描ききる
- 10 点滴の雫に映る胡蝶蘭
- 11 ポリープ切る小豆の粒ぞ彼岸かな
- 12 透析の抱く肩硬き春痛し
- 13 飛翔像合歓に辰子か澄清湖
- 14 南北に三十八度差の彼岸入り
- 15 去り急ぐ奈良の都の散り椿
- 16 安行路空染め香る梅や桃
- 17 公示価と桜前線上陸す
- 18 一雨や北国の春遠からじ
- 19 武蔵野の五月風切るサイクリング
- 20 ふるさとを田沢と呼ばん彼岸花
- 21 夜鳴きする耳鳴り続く春の旅
- 22 椿壽忌に同胞のライ史読み痛む
- 23 象潟へ芭蕉寒し雪囲い
- 24 花まつり苦悩を悟る法話聞く
- 25 散り急ぐ桜に集う小鳥たち
- 26 辛き青春浜大根に蝶が舞う
- 27 飛驒の春告ぐからくりの三番叟
- 28 昔無き済州の春に古老泣く
- 29 代官の清水を飲みし蟬時雨
- 30 あきのいろ恋の調べか虫の声
- 31・53 山代に行基薬師湯谷空木

河正雄コレクション 資料集

(既刊)

■第1号 関根伸夫（「もの派」作家）＝2020年9月発行

往復書簡／「散華」作品と原図／李禹煥「関根伸夫」論

■第2号 川田泰代（ジャーナリスト・平和活動家）＝2021年1月発行、3月第2刷

涼州詞と泛海詩／書がつなぐ縁／陳玉璽救援／中国との絆／評伝

■第3号 岩田 健（彫刻家）＝2021年4月発行

評伝「岩田健彫刻の歩み」／兄の碑／「永瀬四朗日記」と関東大震災

■第4号 江上 越（アーティスト）＝2021年8月発行

江上越×河正雄「コミュニケーション」／千葉成夫「江上越論」

■第5号 菊池一雄（彫刻家）＝2021年10月発行

ふるさとの碑・平和の群像／浅川兄弟顕彰碑／在日韓民族慰霊塔由来碑

■第6号 千葉成夫（美術評論家）＝2022年1月発行

千葉成夫「河正雄論」／河正雄「美術は人なり」／インタビュー

河正雄コレクション 資料集 第7号

植 松 永 雄

2022 年 4 月 30 日発行

発 行 河 正雄

<https://www.ha-jw.com/>

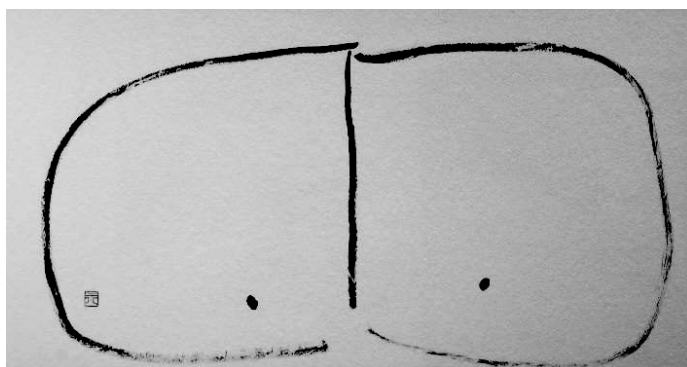
編 集 菊地 正志

印刷製本 株式会社 双信舎印刷

非売品

表紙：植松永雄書「吾」

裏表紙：植松永雄書「母」



河正雄コレクション 資料集 第7号

植松 永雄